

双子系Vtuber、はじめ
ました。

えびんす

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

今年成人を迎えた双子の兄妹、柳瀬遙人と柳瀬遙香。

ひよんなことからVtuberという存在を知った妹に誘われ、双子系Vtuberとしてデビューすることに。

自分が人気になれるなど欠片も思っていなかった兄だが、二人の配信は予想以上に反響を集めていき……

こういう兄妹の配信が見たい！

日常が見たいわ！切り取って頂戴！

みたいなのがあったら感想に書いて頂けると採用するかもしれません。

目次

プロローグ

〜とある少年視点〜 | 1

第一章

#01 きっかけは些細なこと〜

15

#02 社会で本当に必要なことは学

校で教えてくれない〜 | 34

#03 珠緒という女から見た柳瀬兄

妹〜 | 45

#04 反り立つ壁（面接）〜

57

#05 準備と期待と、覚悟と。〜

66

#06 双子系Vtuber、はじめ

ました。〜 | 79

#07 反省会で本当に反省してる奴

いない説〜 | 99

#08 二回目だから大丈夫とかそん

なことはない（前）〜 | 116

#08 二回目だから大丈夫とかそん

なことはない（後）〜 | 128

#09 喫茶店行くときでもないと食

べないよね、ピザトースト（前）〜

147

#09 喫茶店行くときでもないと食

べないよね、ピザトースト(後)ゝ

166

#10ゝ追い詰められた遥斗はなんか

もう色々とアレである(前)ゝ | 181

#10ゝ追い詰められた遥斗はなんか

もう色々とアレである(後)ゝ | 199

#11ゝ陰キヤが遊びに誘うのにどん

だけ勇気のリソース使うか知ってるか？

ゝ

218

プロローグ

〜とある少年視点〜

春。吹き抜ける風が冷たくなり、桜の花が町のあちこちで咲き誇り始める季節。

日本のとある町に暮らす少年は、夜、自室のPCの前に座り、マウスカーソルを画面内にさまよわせていた。

ちら、と壁に掛けられた時計を見た。まだ『予定時刻』までは時間がある。それまで何をして時間を潰そうと考え、しかしそちらに夢中になって見逃してしまうのも嫌で。結局画面の前で、大して興味もないネットニュースや動画サイトを漁り、ネットの海に意識を漂わせる。

少年には、近頃夢中になっているものがあつた。

『バーチャルWetuber』。通称『Vtuber』と呼ばれる、少々特殊な配信スタイルをもつ動画配信者の総称である。

世界規模で利用されている巨大動画投稿サイト『Wetube』。取るに足らない日

常を映した動画から、億単位を超える再生数をたたき出した伝説的なミュージシャンのライブ動画まで、幅広いジャンルの動画が投稿されている。

その中でも、投稿者自らが動画内に出演し、話題の映画やゲームの評価をしたり、身体を張ったバラエティ企画を行うさまを投稿し、広告料などで収入を得る『We t u b e r』と呼ばれる者たちがおり、ここ数年で一大ジャンルとして名を広めていた。

『V t u b e r』はそのWe t u b e rと呼ばれる者の中でも少々特殊で、自らの顔を出さず、『アバター』『ガワ』と呼称される、二次元キャラクターのイラストを用いる配信スタイルをとる者たちのことを指す。

V t u b e rの特殊性は、なんといっても「顔が出ない」こと。自身の容姿の美醜にかかわらず、アバターさえ用意できれば誰でも美男美女の配信者として活動できることだ。中には人外のキャラクターを用いる配信者がいるなど、一概には言えないのだが。

それでも配信者本人の顔が出ないということ、それ自体が多大なメリットであることには間違いなく、またそれらの視聴者には『リアルの容姿は求めてない。気に入ったキャラクターが喋って動いているのが楽しいんだ』という考えを持っている者も少なくない。

これらは要因としてはごくごく一部だが、その特殊性と需要の高さからV t u b e r

は年々数を増やしており、今や個人で活動する者、企業に属する者、世界中の視聴者に注目される者からほとんど日の目を見ない者まで、多種多様、十人十色、ピンからキリまで様々だ。

少年はその中でも、最近頭角を現し始めてきたとあるV t u b e rの生配信を、今か今かと待ちわびていた。

やがて開始時刻10分前。SNSサイト『ボヤイター』でフォローしていたV t u b e rのアカウントから通知が飛んできた。

【まもなく配信します。みんなぜひ覗いてみてください！】

少年は急いで件のV t u b e rの動画投稿チャンネルへと移動する。生放送枠にはすでにたくさんの視聴者が訪れ、コメントを打ちながら放送開始を待っていた。

：おっ！

：間に合った！

：まだかまだか

：今日もシンク口絶叫聞けるかな

：ユニゾン絶叫は鼓膜に効く

：効きすぎて双子の声以外何も聞こえなくなつたゾ

：幻聴聞こえてますね・・・

：破れた鼓膜交換してもろて

少年もコメントを打ち、待機する。

：あらかじめ鼓膜を破っておいた俺に隙は無かつた

：隙どころか穴があるんだよなあ・・・

：絶叫で鼓膜を破られる快感を味わわないとか正気か？

：お前が正気に戻れ

：サイコパスこわ

：なんで双子んちやべー奴が集まってしまふん？

：やべー奴筆頭だからだろ

：草

：辛辣だけど否定できない

思わず苦笑する。少年もこれから放送を行う配信者に対しての総評は概ね似通っていた。

考えることはみんな一緒か。そんなことを考えるうち、真っ暗だった配信画面が切り替わる。

フリー素材であろうどこかの部屋のイラストに、やはりどこかで聞いたことのあるフリー音源が流れ出す。そして画面の両端には、よく似た顔の美少年と美少女。

：きちやあああ

：はじまた！

：やっぱり顔がいい

：こんちやー！！

今日の主役の登場に俄かに沸き立つコメント欄。

グレーを主体としたブレザー制服に身を包み、男は黄色と緑、女は赤と青のメツシユ

が一部に入っている茶髪。そしてどちらもライトグリーンの瞳を持っていた。

活発そうな表情の美少女と、どこかクールな印象の美少年。

『みんなー、こんついんー！ライブラフ所属の双子ライバー、妹の方の御簾納里奈^{みすのりな}ですー！』

『みなさん、こんついん。同じくライブラフ所属の双子ライバー、兄の方の御簾納優斗^{みすのゆうと}ですー』

印象通り快活に挨拶する、里奈と名乗った少女と、穏やかに口上を述べる、優斗と名乗った少年。

「V t u b e rのやべー奴隔離所」「キワモノ担当事務所」「個性の殴り合い宇宙」「闇鍋」
e t c。数々の異名を持つV t u b e r事務所『ライブラフ』所属のV t u b e rの中
でも人気を誇る二人のライバー。

『御簾納里奈』『御簾納優斗』。双子という属性を前面に押し出した、双子系V t u b e rである。

『おう待機所のコメ見てたぞ、誰がやべー奴筆頭じゃ言ったやつ出てこい』

『そういう言動するからやべー奴言われるんだぞ、いい加減学べ』

『兄ちゃんだつてそのコメント見たとき若干キレてたじゃん』

『表に出すのがダメだつってんの』

…ヒエツ

…兄もキレてて草

…お、俺じゃねーし（震え声）

…→里奈姐さんこいつが言いました

…俺も聞きました

…そいつが犯人です

…お前らア!?

『お、その君かあ、君あとで屋上ね』

『何度も言いますが屋上には鍵が掛かっけて入れないので安心して下さいね』

『じゃあ校舎裏』

『塀じゃなくてフェンスだから目立つ』

『体育倉庫は』

『そこならいいぞ』

：いいのか（困惑）

：妹のお仕置きは止めないスタイル草

：的確に目立たない場所絞り込むのこわい

：やめろ体育倉庫は俺に効く

：トラウマ扱られてるやついて草生えない

：トラウマニキ強く生きて

テンポよくこなれた会話を繰り広げる優斗と里奈、それに合いの手を入れるように流れ続けるコメント欄。この兄妹ならでもとも言える会話のテンポの良さと、腹黒さとチクリと毒のある物言いがハマる、という視聴者は多い。そして双子というV t u b e rの中でも珍しい特徴が受け、同企業所属のライバーの中でも上位に食い込む人気の二人だ。

『里奈、クラスメイトのトラウマ掘り起こした罰として今日はマシユマロ返したあとホ

ラゲ実況な』

『ええ!? やだよホラゲ! 前に散々やったじゃん今日はいいでしょ!』

『この前俺がとつておいたチヨコ勝手に食ったことまだ許してないからな』
『謹んでプレイさせていただきます』

…草

…草

…食べ物への恨みは恐ろしいな

…弱み握られててかわいい

…兄貴チヨコとつておいてるのかわいい

…兄妹喧嘩てえてえ

『でも兄ちゃんもホラゲ苦手じゃん』

『そう、だから俺は今回「ホラゲ実況中に叫ばない」を個人的目標にしたいと思う』

『秒で失敗するなこれ』

『少しは兄を信じられんのかこの愚妹は』

『あたしの兄ちゃんを全面的に信じたこその答えだけど?』

『そんなネガティブな方向で全幅の信頼寄せられなくなかった』

：ユニゾン絶叫聞けないん？

：兄妹の絶叫聞きたかったからこの梓開いたの！

：絶叫して

『ほら兄ちゃん求められてるよ？需要と供給だよ？』

『うるせえ俺は叫ばんぞ！絶対叫ばんぞ!!』

『ええ……まあいいや、やるならやろうよ。あたしも覚悟決めたからさ』

『よーしじゃあ今回実況するホラーゲームは……』

少年は御簾納兄妹の配信を見ているうち、いつの間にか自分の口角が上がっていることに気づいた。

学生服を身に包んだ少年少女のイラストと、まるで友達の会話を聞いているような妙な心地よさ。少年はこの雰囲気が好きだった。

『うつわあ……夜の廃墟マジで怖い』

『毎回思うけどなんで人捜すのに夜中に一人で行くんだろうな』

『だよね、明るいうちに人たくさん呼んで探せって思う』

『というかまず警察に任せてしかるべきだろ、行方不明なんだから』

『それを言い出したら大半のホラゲが成立しなくなるし……』

『成立しなくなつてこの世からホラゲというジャンルが消え去ればいいのに』

『マジでそれ』

…草

…ホラゲの時意見がびつたり合致するの草生える

…まあ兄妹の一理ないこともない

…そうかな……いやそうか……

…だからホラゲが成立しなくなるだろ！

なんとなしにW e t u b eの動画を流し見ていた時、偶然目に飛び込んできた御簾納兄妹の切り抜き動画を、なんとなく再生したのが少年のV t u b e r生活のきっかけだった。

肩の力が抜けるような穏やかな雑談配信、兄妹の代名詞ともいえる「ユニゾン絶叫」が生まれたホラーゲーム実況、高い歌唱力を生かした歌配信と、声帯のポテンシャルを見せつけたモノマネ企画。

彼ら兄妹のほかにも様々なV t u b e rに興味を持ち、切り抜きやアーカイブを見してきたが、やはり優斗と里奈の二人に落ち着くのだ。

いつの間にか少年にとって、彼ら二人の配信は、生活になくはならないものになっていた。

『あつあつあ、今なんかいた！なんかいたよね!?!』

『いやいや自分の影だって絶対そうだって』

『ホラゲでそういうの通じないって分かってんでしょうが!』

『分かっても理解したくねえんだよ!』

『あたしだってそうだよ！　　とかそろそろ操作代わってよ!!』

『まだ序盤も序盤なんだわ!!　　とかお前の罰なんだからつべこべ言わずプレイする

!!』

『ふあつきんまいぶらぎー!!!』

：親の声より聞いた兄妹喧嘩

：もっと親の喧嘩聞け

：（親の喧嘩はもう聞きたく）ないです

：親の喧嘩の声聞いて育ったワイ、フラッシュバックで悪寒が止まらない

：両親不仲ニキかわいそう

：兄妹のクラスメイト聞かえてるやつ多すぎ問題

：そら兄妹より長く生きてるクラスメイトばかりだからな

：クラスメイトなのに年上？ 妙だな……

：何年留年してるんですかね……

少年はPCの画面を見つめながら、思う。

ああ、自分は、V t u b e r が。

御簾納兄妹が、本当に好きなんだなあ、と。

『わあああああああああ
!!!!!!
』

：うるせえ!!

：鼓膜吹き飛んだ

：ユニゾン絶叫助かる

：ノルマ達成

：何も聞こえない 何も聞かせてくれない

：壊れかけなのはラジオじゃなくて鼓膜

：叫ぶと妹と同じ音域になる兄貴好き

：お耳キーンなるこの感覚癖になっちゃやうヤバイヤバイ

少年は痛む鼓膜に顔をしかめながら、それでも笑っていた。

第一章

#01 くきっかけは些細なこと

自分は平凡な人間だ。

少なくとも、自分自身が、自分を客観的に見て、そう思っていた。

「遥斗、Vtuberやってみない？」

「は？」

妹にそう言われるまでは。

日本のある街。

首都圏とも、世間から隔絶されたような山中の村落とも違う、どこにでもあるごくごく普通の地方都市。

県の中でも一位を譲るが二、三位を争うそれなりの規模の市。新幹線も停車するそこ

そこ大きな駅に、それなりに商業ビルが立ち並んで栄えている駅前。少し駅から離れれば繁華街などの大人の街並みが軒を連ね、そこからさらに離れれば、地方では有名なローカルなスーパーマーケットに、その周辺を囲う住宅地。

どこにでも見られるような。本当にごく一般的な日本の地方都市。

その中心部である駅から少し歩いたところにある、比較的最近に建てられた高層マンション。

中流層、富裕層をターゲットにしたそこそこ値の張る分譲マンションの最上階。

そこが俺、柳瀬遥斗やなせはるとと、妹の柳瀬遥香やなせはるかが住む部屋だった。

「……すまん、遥香。もっかい言ってくれ」

その部屋の、二人で住むには広すぎるリビングの、これまた二人では囲いきれない大きなダイニングテーブルに二人で向かい合って座っていたとき。

妹、遥香からの唐突な提案に、俺はまいちその意図というか、言葉の真意を図りかね。もう一度、「話をかみ砕いて喋れ」と言外に問うた。

「だから、あたしと遥斗でさ。V t u b e r やつて、お金稼ごうよ」

「オーケー妹よ、まずさっそく話の腰を折って悪いんだが、V t u b e r ? って一体なんだ？」

正直に言つて、俺はV t u b e rという単語に全く聞き覚えがなかった。

おそらくはどこかで聞きかじった「W e t u b e r」のような、それともまた違うような何かではないかと予想はつくが、内容に関して全く想像ができない。

「W e t u b e rは知ってるでしょ？その顔出しじゃなくて、イラストとか使つてW e t u b e rみたいな活動する人のこと」

「要は……………アレか、俗にいう配信者つてやつか」

「そう」

「なんでそれを俺と遥香がやろうつてことになるんだ？」

確かw e t u b e rは動画投稿して、その時に動画に広告挟んで、その広告料で収入を得てるんだよな？ 中にはそれで億単位を稼いでいる猛者もいるとかいらないとか。

確かに魅力的でロマンがある話だが、俺たちがわざわざやるようなことだろうか。

「……パパとママが死んで、今日で3年でしょ」

「……ああ。もうそんなになるんだよな」

「……さすがにさ。パパとママの遺産ばかりに頼ってちゃいけないって思ってたさ」

「だからV t u b e r ってか？」

「うん」

遥香は、自分が言っていることの意味不明さを分かっているのか、遠慮がちに、ともしれば俯くかのように、ゆっくりと頷いた。

俺たちには両親がいない。別に捨てられたとか、子供を置いて蒸発したとかそんなんじゃない、普通に交通事故で亡くなった。

毎年楽しみにしていた結婚記念の、夫婦水入らずでの旅行。二泊三日の温泉旅行のために長距離バスに乗った際、山中で落石に巻き込まれた。

遺体には合わせてもらえなかった。生存者0という悲惨な事故の被害者は、直視できないほど酷い損傷を負っていたそうで、俺たちの両親も例外じゃなかった。

残されたのはこのマンションの部屋と、俺たちの大学費用らしいまとまった貯蓄、生命保険。そして家族の思い出プライスレス。

当分暮らせるだけの生活費はあるが、それに甘えてばかりもいられない。大学には行かず、俺も遥香も当面の安定した収入が必要になった。

「……普通に会社員じゃダメなのか」

そう、普通に考えれば就職することだ。それが一番手っ取り早い。わざわざ収入を得られるだけの地位にたどり着けるかどうかも分からないV t u b e rでなくとも、それでいいのではないか。

———そうすることができない理由は、想像がつくとしても。

「……無理だよ。あたし、もう遥斗以外信じられない」

「遥香……」

「大人がもう信じられない……親戚も、そうじゃない奴も、誰も……」

遥香はそう言って再び俯いた。

俺たちは、生まれ育った環境に関しては、恵まれていたと思う。

家族びいきで見ても整った容姿だった親父と母さん。特に母はロシアとイタリア、日本のクウォーターの美女で、街を歩けば十人が十人振り返るような人だった。

父も父で、最終的には上場企業のサラリーマンだったが、下手な俳優より整った顔立ちだった。昔父の友人に勝手にアイドルオーディションに応募されたと言っていたが、あながちあり得ない話ではない。今となつては真偽も確かめようがないが。

そんな両親の下に生まれた俺たち兄妹も、自分で言うのもなんだがそれなりに整った容姿だ。遥香は学年問わず男子に告白された回数は数知れず、俺もよく女子に声を掛けられていた。

だけど、両親の事故の後は皆俺たちから距離を置いた。

あの事故のことを聞いたのだろう。以前とは別人のように、表情に暗い影を落とす遥香と、無意識のうちに周りと壁を作っていた俺。誰も彼も、俺たちとどう接していいかわからず、腫れもの扱いだった。

教師も親身になっているつもりだっただろう。しかし「面倒くさい」と目が語っていた。

そして親族も俺たちの味方じゃなかった。誰も彼もが、俺たちの後見人を名乗らな

かった。

「もう高校生だし」「大人の目が必要なほどじゃない」「アルバイトでもやっついていけるでしょう」

ガキは要らないと。むしろ両親の遺産の方がよほど価値があると、言葉の裏が透けて見えるようだった。

俺も遥香も、そんな大人たちを信用できなかつた。

自分がしつかりしないと、大人たちにいいようにされる。俺が妹を、たった一人の肉親を守らなければ。

今考えても、その選択は間違っていないだろう。だが、もつと取れる手段があつたはずだ。

所詮は高校生。どこかに伝手があるわけでもなく、ただ高校を卒業したのちは、機械的にアルバイトをする日々。

このままではいけない。早く安定した収入を得なければ。そう考えはするが。

「……あれ以来、人と上手く話せなくなっちゃった。みんな心の奥底で、あたしたちのこ

とどう見てるか、怖くなって」

「……………」

俺も、遥香の気持ちはよく分かった。

他人の目が、怖くなった。自分をどう見ているのか分からないのが、どうしようもなく恐怖だった。

俺も、そうだ。そうなった。

人の目を見て話せない。目を見たら、自分の心を見透かされそうな気がするから。

相手とペースを合わせて話せない。そうしないと、会話の主導権を握られる気がするから。

人の感情の機微が分からない。だって、自分の感情を相手に悟られたくないから。

そんなこと、事故の前はまったく気にしてなかったのに。

両親の死から起こった一連の人間関係は、俺たちが思っている以上に、俺たちの人格に影響を及ぼしていた。

端的に言えば、コミュ障になってしまったのだ。

でも、と遥香が顔を上げて続けた。

「でも、このままじゃダメだよ……このままじゃ、あたしたち本当にダメな人間になっちゃう」

「……………」

「人のこと、一生疑いながら生きる人間になる。自分でも気づかないうちに、たくさん、たくさん人を傷つける人間になる」

「…………いや、遥香が悪いわけじゃ」

「そんなの!!」

バンツ、と両手をテーブルに思いきり叩きつけながら、遥香が立ち上がる。

そして、その勢いが急速に弱まりながら、それでも、遥香は弱弱しくつぶやいた。

「……………そんなの、パパもママも望んでない」

「……………」

「嫌だよ……天国のパパにも、ママにも……顔向けできない人間になりたくないよ」

そうだ。

遥香の言うとおりで。

このままでは、親父にも母さんにも、顔向けできない。

人を一生疑ってかからなければ生きられない人生など、どれほど窮屈か。今この時ですら苦しいのに、これが何十年と続くなんて、耐えられない。

俺も、そんな人間になりたくない。両親が悲しむような人間になりたくない。

だが、それでも疑問が残る。

「だけど、それでなんでV t u b e rなんだよ」

遥香は俺の疑問に答えず、ポケットからスマホを取り出し、W e t u b e アプリでとある動画を開いた。

「……………これ見て」

「……………?」

遥香に手渡されたスマホに映し出された、一つの動画。

タイトルには「神輿みこし羅世良らせら、若衆のいじりにキレてしまう」。

なんじゃこりや、と思いつながら画面をタップし、動画を再生する。

『ラッセラーイー!! 若衆のみんな元気かー!? 神輿羅世良のお祭り雑談にようこそー!!』

そこにはねじり鉢巻きに祭法被を羽織った少女のイラストが、まるでアニメーションのように動いているのが映っていた。

：ラッセラーイー!

：ラッセラーイー!

：姐さん今日も汗が輝いてるぜ!

：姐さん汗拭きます!

：馬鹿野郎俺が拭くんだよ!

：新参はどいてろ俺が拭く！

：古参のおっさんども見苦しいぞー！

：そうだそうだー若者に譲れー！

『お前ら誰がアタシの汗拭くとかしようないことで喧嘩すんな!! アタシとお喋りしに来たんだろうが!』

それは、俺にとってあまりにも新鮮で。

『———つてことがあってさー、アタシマジでショックだったわけ。ほら若衆アタシを慰めろよ』

：マジでかいそう 相手が

：なんてひどい奴なんだ！姐さん謝って！

：姐さんカタギには手エ出さないとて約束したでしょ

：これはエンコ案件ですわあ姐さん……

：マジかよ姐さん最低だな

!!
』

：姐さんが怒った

：ヒエツ

：許してください命ばかりは

：そんなんだからいつまでも独り身なのは（ボソツ

：あつ（察し

：オイオイオイ死んだわアイツ

：無茶しやがって……

：おかしい奴をなくした

：骨は拾ってやるよ 嵐が過ぎた後にな

『テムエふざげんなあああツ!! ライン超えたな!? ライン超えちやつたなテムエオイ
!?’

あまりにも、眩しかったんだ。

「この『ライブラフ』って、今波に乗ってるV t u b e r事務所なんだけどさ。今2期生までいて、今度3期生を募集するらしいの」

「……つまり？」

「第三回オーディション開催するってこと。個人だったら機材からイラストから全部用意しなきゃだけど、ここなら機材とイラストは最低限用意してくれるし、バックアップもちゃんとしてるみたいだしさ」

「お、おう……？」

よく分からないが、サポートとか福利厚生はしっかりしている会社だ、と言いたいのだろうか。

確かに下手に就職して飛び込んだところがブラック企業でした、なんていう事態は俺も避けたいが、それだけではV t u b e rになる理由としては弱いような……。

「……遥斗。これなら、何とかなると思わない？」

「何とか、って？」

「あたしたちのコミュ障、治すきっかけになると思わない？」

そういった遥香は、ひどく真剣な目で。

しかし決して、冗談で言ったわけではないのだと。俺は理解できた。

「初めから相手の顔が見えなくて、ただ流れてくるコメントだけならさ。コミュ障を治すきっかけにならないかな」

「……………」

「手段としてはおかしいってことは分かってる。でも、やってみなくちゃ分かんないじゃん？」

それに、と遥香が付け加える。

「遥斗と一緒にやってくれるなら……頑張れる気がするの」

嘘偽りのない。まっすぐな目で、妹は俺を見ていた。

そうか。お前はお前なりに、ちゃんと考えてたんだな。

「……ダメ、かな」

三度、俯く。

それなのに、俺はダメな兄だ。

遥香の提案がダメなんじゃない。妹にきちんと相談せず、兄だからと、自分が何とかしなければと考えて、妹の気持ちをないがしろにしていた俺がダメなんだ。

ダメで元々だ。どうせコミュ障、治せる目処もきつかけもないのなら、いつそのこと賭けてみればいい。

それに妹の言うことにも一理ある。相手の目を見ず、心を探らないで済むコメントなら、とりあえず文面通りに受け取ればいいのなら。

それだけで済むなら、これほど楽な特訓相手はない。まずコメントと会話すること
で、この無駄に慎重に相手を探ってしまう癖を治せていければ。

いずれは、きっと社会復帰も叶うのではないか。

甘い見通しではあるが、何もしないよりはマシではないか。

「分かった。お前に付き合うよ。やるよ、V t u b e r」
「……ありがと、遥斗」

妹の提案を呑むと告げたとき。

俺は久々に、妹が心から微笑んだのを見られたのだ。

そして俺たちは早速挫折しそうになった。

「遥香………行くぞ」

「ごめ、無理……もうちよつと待って、心の準備、が………うおえつ」

「諦めろ、元はと言えばお前が言い出したことだろ………うぷ」

「遥斗も人のこと言えないじゃん………うえっ」

———
就職するうえで一番大事なこと。

面接という、俺たちにとっては高すぎる壁が聳え立っていることを、すっかり忘れていたのだ。

#02～社会で本当に必要なことは学校で教えてくれない～

「ライブラフ」。群雄割拠のVtuber業界において、破竹の勢いで勢力を伸ばしている、今もつとも勢いのあるVtuber事務所である。

個性豊かなVtuberを多数抱え、全員がチャンネル登録数10万人越えという肩書きを持っている。

特に1期生と呼ばれる3人は既に50万人という大台を突破、いわゆる企業勢と呼ばれるVtuberの中でもトップクラスの人気を誇っていた。

そんなライブラフが某日、満を持して「3期生オーディション」を発表した。

「誉めると増える」「また増やすのか」「アレみたいな逸材がいるのか?」「溢れる闇鍋の具材」etc……

ライブラフがまた逸材を増やすという期待、今所属しているライバーに勝る奴が果たしているのか、という不安。入り交じったそれらは瞬く間に全国へ拡散した。

ライブラフの募集要項は3つ。

「おもしろー動画送った奴優勝」

「好きなことなら無限に語れるぜってやつちよつと来い」

「V t u b e r好きってことアピールして♥？」

要約するとこんな感じである。

まず一次審査では動画を送る。内容はなんでもよく、とにかく審査員の目に留まれば勝ち。歌動画、モノマネ動画、はたまたこれだけは負けない！という自分の特技など。

それをパスしたら次は書類審査。これは企業に所属、言ってしまうえば就職に近いのだから大事なことである。履歴書はきっちり書け。ここで大半がふるい落とされる。

俺達は、この書類審査に合格した。

「やった！遥斗やったよ最終審査だよ！」

「まさか通るとはなあ……」

正直最初の動画審査で落とされると思っていた。なにせ俺達のアピール出来る強みといえは「双子の兄妹」ということだけで、他に自慢できる特技と言われてパツと思いつくものがない。

さらに言えば配信者らしい機材も何もない。この時点ではほとんど詰んだようなものだった。

悩んだ俺達は、ダメ元でスマホに歌を録音し、それをPCへ転送。慣れないMIXソフトとかいうもので四苦八苦しなから楽曲と合わせ、「双子で歌ってみた」の音源を作成。

画面が真つ暗なのもどうなのか、という遥香の提案で、動画編集ソフトで簡単な動画を作り、音源と合わせる。

この時点で俺も遥香も疲労困憊といった有り様だった。

V t u b e r ってのはこんなことほぼ毎日やっているのか？ 仮に俺達がなれたとしてもこんなこと続けていけるのか？ 正直軽く見ていたが前言撤回、尊敬するよ。

とにかく、これで応募するための動画が出来上がり。早速ライブラフに送りつけた。

これでダメならまた他の方法を探さなければ。そんな考えをよそに届いたのは、一次

審査合格の通知。

「マジか……」

「通っちゃった……」

これには俺も遥香も思わず困惑。何が審査員の琴線に触れたのか解らない。

解らないが、ともかく次の書類審査だ。合格通知には、履歴書ともう一つ、V t u b e r になってやりたいことを簡単でいいので書くように、とのこと。

「やりたいこと、か」

「なんだろ……遊ぶ金欲しさ？」

「犯行動機だろそれ……コミュ障を治したいんだろ」

「そうなんだけどさ、それをバカ正直に書いていいのかなって」

「それは……まあ、確かに……」

コミュ障を治したいです、面白いねハイ合格、とはならないだろう、普通に考えて。妹が正しい。

だが俺達がV t u b e rになるのはそもそもが社会復帰のためだ。これを抜きに書いてしまうと、どんな文章も薄っぺらくなってしまうような気がする。

「やつぱり書いておこう。まともに人と話せるようになりたい、V t u b e rをその足掛かりにして、社会復帰の第一歩にしたいって書けば多少は伝わってくれ……はず」

「すっごい不安んだけど……まあここまで来たらちゃんと書くしかないかあ」

「……遥香、そこ誤字」

「んじゃああまた書き直しだあ!？」

失敗しちやいけなと思うほどやらかす現象、あると思います。

ともあれ、人と上手く話せないのを治したい、V t u b e rをきっかけに、社会に問題なく出られる人間になりたいということを、出来るだけ誠実に伝わるよう文章におこす。

社会復帰の為にV t u b e rというのもおかしな話だが、これが俺達の志望動機なので書かないという選択肢はない。出来るだけ誤解なく伝わるよう、誠実に、分かりやすく。

果たして、書類審査も無事合格通知が届いたのだった。

「いよいよ最終審査かあ……それも合格したら、いよいよデビューなんだね」

「合格したら、な。まだ気が早いだろう」

「だってあのちゃんな動画からここまでこれたことが奇跡みたいなもんじゃん！ このまま最後の審査も合格もぎ取っちゃおうよ！」

「はいはい、だからちゃんと次の面接もお行儀よくしろよ」

「分かってるって！ いくらあたしでも面接ぐらい行儀よく………」

「……………」

「……………」

俺も遥香もそこで気づいた。気づいてしまった。

俺達、人と話せないのに、面接できるのか？ と。

そして面接当日。

「あー緊張する……吐き気してきた」

「吐くなよ、絶対吐くなよ？ 絶対だぞ？」

「その言い方やめて……吐かなきゃいけない気がしてくる」

「いつそ吐いた方が楽になるかもな」

「面接官に吐瀉物の臭い撒き散らすのはアウトでしょ……」

都内某所。通知書に記載されていた住所にたどり着いた俺達を待っていたのは、見上げるようなオフィスビルだった。

そもそもライブラフというのは正式な会社名ではない。

正式な名称は「株式会社フロート」。主に仮想現実や拡張現実などの企画、開発を行う次世代IT企業。その業績は、一般人の俺達でもニュースなどで時々耳にするぐらいだから、業界的にはすごい会社なのだと思う。

そのフロートが新たな可能性として立ち上げたのが、「ライブラフ・プロジェクト」。誰でも気軽に、笑って使ってくれるVR、ARプラットフォーム企画。

その第一歩として目を付けたのが、当時やっと注目され始めていたバーチャルWetuberだった。

Vtuberを自社で集め、やがて発表するプロジェクトのケースモデルにする。当時としてはかなり無茶な目的だった。

だがフロートは見事ビジネスチャンスをつかんだ。集まったライバーはことごとくが人気を集め、ライブラフ、そしてフロートはVtuber業界において一、二を争うVtuber事務所ブランドとしてその地位を確立させた。

それを機に自社を現在のオフィスビルに移転、同オフィス内に複数のスタジオを抱える、今最も勢いのある事務所である。

……というのが、俺達が自主的に調べたライブラフの情報だった。

ほぼ初めての大都市で迷わないよう住所を調べたついでに概要を見ていたので、規模などはそれなりに理解していたつもりだったが……。

「改めて見るとマジでデケエな……まあこれ全部じゃないだろうけど、それでもこんなところにオフィス構えるって相当だよな」

「うう……兄上エ……オラやっぱ無理だあ、もう家さ帰ってえ……」

「似非かつぺする余裕があるなら平気だな、覚悟決めて行くぞ」

「待つて待つてマジで待つて、割りとマジでお待ちくんなんしマジで」

「もはや何語よ」

「いやもう無理マジで無理死ぬ無理死ぬ死ぬ」

「待つてや」

「ここまできて遥香がコミュ障の極みを發揮してバックれようとするのを首根っこ掴んで抑える。」

「お前ここまできて帰ろうとするな」

「離せ兄者ア！ こんな人の目が四方八方ある空間にいられるかあたしは帰らせて貰うツ!!」

「お前が始めた物語だろうが遥香ア！ 俺だって正直帰りたいいけど必死で耐えてんのに言い出しつぺのお前が帰るなオイ!!」

「無理だつて無理だつてえ!」

「無理つていうのは嘘つきの言葉なんですツ!!」

「びいびいびい!」

「なおも逃げ出そうとするじゃじゃ馬を必死で繋ぎ止める。コイツだけは絶対に逃がさん。」

「というかこんな往来で騒ぎ立てたら余計目立つのが分からのかコイツは。」

「俺達。どうか逃げ帰ろうとする愚妹を宥めすかし、ようやくビルのエントランスに入った。」

「なるほど中も清潔だ。一等地に立つオフィスビルだけあって清掃も行き届いているのが手に取るように分かる。」

「俺は妹を引き連れて奥の受付へ向かい、カウンターの受付嬢に用件を告げる。」

「あの、株式会社フロートの面接で伺ったのですが」

「株式会社フロートですね？」

「お繋ぎいたしますのでお名前をお願い致します」

「柳瀬遥斗と、柳瀬遥香です」

「柳瀬様、畏まりました。そちらのソファにお掛けになってお待ちください」

「まずはオーケー。あとは案内を待つだけだ。」

「えっと、緊張は手のひらに人の時を三回書いて飲み込んで……あれ、人って最初に右に払うんだっけ」

……先に妹の緊張をとることからだな。

それから5分ほど時間が経ち、ようやく遥香の緊張がとれてきた頃。

「大変お待たせいたしました。本日の案内と面接を務めさせていただきます、株式会社フ
ロートの末吉すえよし珠緒たまおと申します」

いよいよ、俺達にとって最大の試練が訪れた。

#03 く珠緒という女から見た柳瀬兄妹く

(さて……………どう解釈したものか)

株式会社フロートのオフィスの一角。デスクに置かれた二枚の履歴書と、一枚の便箋を見ながら、末吉珠緒は考えた。

ライブラフ第三期生オーディション。全国から寄せられた多数の応募の中から、珠緒が目を引かれたのは、とある一本の動画だった。

「双子で歌ってみた」。歌動画は少しでも歌に自信があるのならば、比較的題材にしやすい。

実際、ライブラフに限らず、V t u b e rはある程度歌唱力のある者が多く、歌を生配信するのも人気のジャンルで、再生数を稼ぎやすい。

故に、オーディションに応募してきた人たちの大半は歌動画だった。中には有名な配信者からの応募もあり、これらは優先的に合格者候補に回すように上からも指示があ

る。

というのも、配信経験者というのは即ち、こういった動画編集スキルや整った配信環境を最初から所持していることが多いのだ。特に機材に関しては、配信者が気に入ったものを厳選しカスタマイズしている場合が多く、素人も少なくないこの業界においてその辺りの教育をスキップできるのは有難い。

いわゆるコストカットだ。機材を用意する必要がないのは経営的に楽なのだろう。

だが、それらを抜きにしてもこの動画に目を引かれたのは、「双子で」という点だ。

こういったオーディションの応募は普通、1人で行うものだ。必然歌動画に関して「ソロ」で出すのが当たり前であった。

それをこの、柳瀬という応募者は、双子ということと「デュオ」で応募してきたのだ。今までに前例がなかったため、どうしたものか戸惑ったが……。

(応募動画だから、見ずに退けるのもアレだし……)

珠緒は動画を再生することにした。オーディション担当者としてしつかり確認しなければならなかったし、それに……。

それに何より、個人的に、なにかこの動画に惹かれるものがあった。例えば双子であつ

たとしても、それぞれ別に動画を出せば良いところ、わざわざ二人で一つの動画を出してきたのだ。一体何が飛び出すのか、気になって仕方なかった。

新鮮だった。

男女の双子であったのが少し意外だったが、いやまあ珍しいことでもないだろうと一度首を振り、動画に集中する。

楽曲は、ずいぶん前にゲラゲラ動画で再生数を集めていたボカロ楽曲だった。コミカルな曲調とテンポの良い歌詞が人気の曲だったはずだ。そういえば、この原曲で使われているボーカロイドも双子設定があつたような……？ これも含めて選曲したのなら自分達の武器を良く分かっている。

動画の方も、少々拙いが一生懸命さが垣間見えて微笑ましい。粗削りだが、磨けば光るものがあるだろう。

歌に關してもそうだ。まだ素人の域を出ていないものの、少しトレーニングを行えばいい線いくのではないだろうか？ 音域もどちらも素人ながら、かなり広いと思う。訓練次第でもっと拡げられるのでは？

そもそも声質もいい。快活ながら透明感のある声を出す女性と、落ち着きがありながら奥行きのある声を出す男性。ボイス販売したらかなりいい数字が出るのでは……。

「……………」

気がついたら、この双子の可能性について延々と考え込んでしまっていた。まだ他にも見なければいけない動画が沢山あるというのに、つい時間を忘れて物思いに耽ってしまっていたのだ。

柳瀬遥斗と、柳瀬遥香。これは……かなりいい人材なのでは？

「……………」

珠緒はもう一度双子の動画を最初から再生した。というのも、この動画の冒頭には、彼ら兄妹の簡単な挨拶が顔出しで録画されていたのだ。

『初めまして、こんにちは！　今回三期生オーディションに応募させていただきました、

柳瀬遥香です！ そして？』

『初めまして、同じく三期生オーディションに応募させていただきます、柳瀬遥斗です』

『よろしくお願い致します！』

『あたしたち、双子の兄妹ということ！ これがオーディションにおいて強みになるんじゃないかと思ひ、この動画を応募しました！』

『拙いながら、簡単な動画も入れていますので、是非聞いて下されば、そして良ければ、俺達の動画を心の片隅にでも留めて下さっていただければ幸いです』

『いや遥斗それ、挨拶固すぎってどうか謙遜しすぎじゃない？』

『誠意と謙遜を忘れなければ百戦危うからず、っていう戦国の名将「石橋叩喜杉手落地候

おたすけくれぞう
小田助暮蔵」の名言を知らんのか』

『いややりすぎて墓穴掘ってんじゃないぞそのドマイナー武将!! むしろ誰だよそれ!! あたし日本史苦手だけど聞いたことないわ!』

『おう、俺が今作った架空武将だからな』

『……………ふざけやがってえ！ あたしを弄んだな兄者ア!!』

『むしろなんでこんな見え見えの嘘に騙されるんだ妹者よ…………』

『あたしをバカつて言いたいんだなあ兄よ…………戦争じゃあ…………これは日本全国の兄を持つ妹に対する聖戦ジハードなるぞよお…………!』

『なんてしようもない聖戦なんだ……だがまあ、あくまで己の過ちを認めず、あまつさえ歯向かうというのならいいだろう！ 教育してやるまでよ！ 兄より優れた妹など存在しえぬことを！』

『……………はい、というわけで、歌ってみた動画やっていきます！』

『楽曲はギガPで「おこちゃま戦争」、双子で歌ってみた』

『『是非、お聞きください！ どうぞ！』』

そして彼らの歌ってみた動画に戻る訳だが、

珠緒は机に突っ伏し、悩ましげな声で呟いた。

「はああああああああああくくく……………ダメ、無理、しんどい、マジで顔も声もいい……………反則過ぎる……………なんなのこの兄妹天使なの？ 神なの？ 全知全能の顔の良さなの？ は？ これ通したら私面と向かって面接しないとなの？ 死ぬが？ 尊すぎて死ぬが？ 私に死ぬと言うのかこの世界は？」

おおよそ年頃の婦女子が出してはいけない言動を。

この末吉珠緒という女性、フロートという会社の正社員であり、V t u b e r オーディション担当という肩書きを持ち、尚且つ。

「つーか宜しいんか？ 私が未来のライバーを発掘して宜しいんか？ 完全に私の独断と偏見と趣味120%で尊み波動砲発射するぐらい好き勝手やっちゃいますことよ？
それでホンマに上は宜しいので？ 責任はそっちがとれよマジで？」

顔立ちは美人なのに、V t u b e r のことになる途端に人前に晒せない顔でトリッ
プする、「V t u b e r 限界オタク」であった。

「うん、やっぱりこの二人採用しよう、私の権限フルに使ってでも採用、決定」

実はこの珠緒という人物、ライブラフ二期生オーディションの時も関わっていたのだ

(あの動画からは全く想像付かないんだけど……)

珠緒は柳瀬兄妹の応募理由に、少々頭を悩ませていた。

日本人離れした顔立ちと、耳に心地よい明るく爽やかな声。どこに出ても一瞬で人気者になりそうな二人が、わざわざVtuberというジャンルに飛び込もうと言うのだから、如何なるオタクトークが飛び出すのか内心楽しみであったのだが。

(Vtuberをきっかけに、コミュ障を治したい……?)

そこに書かれていたものは、珠緒にとって予想外の理由だった。あの動画からは、そんな様子微塵も感じられなかったのだ。

兄妹らしく息の合った掛け合いと、快活な喋りを披露していた自己紹介と、応募した理由が書かれた一枚の便箋。この二つが珠緒の中で全く結び付かなかった。

これは、あれか？ 私は試されているのか？ こんな理由でもこの会社は面白いと思つて通してくれるのか？ と。

よくいるのだ。せっかく書類選考まで通したのに、応募理由があまりにも不透明だつ

たり、面白半分でまったく合格する気もなかったという人が。

まあこんな特殊な業界だ。野次馬根性でいる者も少なくない。この兄妹もそんな輩と同じなのだろうか？

いや、ならばこれほど丁寧に制作したであろう動画を送るだろうか。こんなに楽しそうに歌うだろうか。

彼らがそんな不誠実な人間だとは思いたくないが、真意は解らない。この手紙が真実だとすれば、あの動画に感じた楽しさや懸命さに説明は付くのだが。

(……………どうしてこんなに気になるのかしら)

珠緒はふと、己の思考に疑問を持った。

どうしてここまでできて彼らを気にしてしまうのか、自分にも解らない。こんな気持ちになったのは初めてだ。あの二期生の娘の時だってこんなことはなかった。

会いたい。ただ、会って話してみたいと思った。まるでなにか見えない縁に引っ張られるかのように。

(……………疲れてるのかしら)

珠緒は自分の思考に思わず苦笑した。ロマンチストもいいところだ。まるで恋する乙女のそれではないか。いや、あの顔の良さと声質に惚れ込んだのだから似たようなものかもしれない。

(……………よし、会おう。会って、確かめよう)

どうせ面接を行うのは自分なのだ、その縁とやらに導かれてみようじゃないか。珠緒は早速合格通知と面接場所を打ち込み始めた。

そして最終面接当日。

「は、初めまして……………や、柳瀬遥斗、です……………こっちは妹の遥香です」
「よっ、よろしくおにえがいひましゅ……………」

まるで蛇に睨まれた蛙のように直立不動で、目を忙しく泳がせ、額に浮かんだ脂汗を拭いてもせず、吃りまくり噛みまくりで自己紹介する件の柳瀬兄妹。

珠緒はいろんな意味で肩の力が抜けるのを感じた。なるほど、あの手紙はまったく嘘

偽りなく真実であつたらしい。

しかし同時に思う。

(これ……無事に面接終わったら奇跡じゃないかしら……?)

珠緒は眉間を指で揉みほぐし始めた。

#04 〳反り立つ壁（面接）〵

「あ、あの、本日はよろし、よろしくお願いします」

開口一番囁みまくりの自己紹介で始まった。初っ端からやかしかした情けなさで早くも泣きそうになってしまいが、まだだ。まだ慌てるような時間じゃない。相手がもう眉間をグリグリしているがまだ慌てあわあわあわわ。

「緊張しますよね。あの手紙から事情は把握していますから、あまり気負わずいきましよう」

「あ、ありがとうございます」

「いえ。ではお二人とも、そちらに掛けて楽にしてください」

そう言って応対してくれた女性……末吉さんは、俺達に座るよう促す。

先程の初対面から場面は変わり、末吉さんに案内されたのはオフィスビルの上階、株式会社フロートが入っているフロアの一室。

応接室というプレートが掲げられた扉をくぐると、恐らく本革と思われるソファがガラステーブルを囲んでいる以外には、観葉植物と何かの風景画が飾られているだけのシンプルな部屋だった。

末吉さんは慣れた様子で上座の長ソファに座り、下座の一人用ソファに俺達を座らせた。

「一先ずお茶をどうぞ」

「ありがとうございます……」

なんだっけ、こういうお茶には「お構い無く」って言つて手を付けないんだっけ？
急ぎの時だけだったか？ いかん緊張しすぎてよく分からなくなってきた。

……遙香はもう湯飲みに口を付けていたが、緊張しているのは分かるが、せめていただきますぐらいは言つとこうぜ。それどころじゃないのは分かるけども。

俺もお茶を飲もうか一瞬迷ったが、末吉さんの「では始めていきましようか」の一言でタイミングを見失った。後で飲もう。

「柳瀬さんは、地方の出身なのですよね」

「は、はい」

「東京を見て、どう感じましたか？」

「えっ……と、率直に言ってもいいですか？」

勿論いいですよ、と末吉さんが言う。

「人の多さに吐きそうになりました」

「あと駅で迷いそうになりました」

末吉さんは俺達の答えに苦笑した。率直にとは言ったがあまりにもばか正直に言いすぎただろうか。

「ああいえ、いいんです。お二人の事情なら仕方ないと思いますから」

「昔はこんなじゃなかったんですが……」

「責めているわけではないんです。色々事情を抱えている人なんて沢山いますし、ウチにもお二人と似たようなライバーが居ますので」

末吉さんはそういつて微笑んだ。

……駄目だ、この微笑みですら裏を勘繰ってしまふ。いつそ無表情の鉄面皮で居てくれた方が楽だったかもしれない。

改めて思う。俺は本当に駄目な人間になってしまった。相手のこと全てを過剰に疑ってかかるような、そんな人間に。

遥香は……いや、遥香も同じだ。

聞かなくても解る。伊達に20年兄妹やってる訳じゃない。

解らない。この人の気持ち、その目が、笑みが。

どんな顔をしているのか、解らない。

「……………深刻なのですね」

「あ……………」

末吉さんに察せられてしまうぐらい顔に出てしまつたらしい。

大事な面接なのに、こんな調子じゃ……………。

「……………お二人にどんなご事情があつたのかは、私には分かりませんが、相当な苦勞があつたのだと思います。きっと、周りの人間を信じられなくなる程に」

「……………すみません、こんな時に」

「……………正直申しまして、あの手紙をもらった時は、私は試されているのかと思ひました。今までにない志望理由でしたから、面白半分で応募したのかと」

それを言われると反論できない。自分で見てもおかしい理由なのは重々分かつているつもりだ。

V t u b e r やつてコミュ障治るなら世話ねえよ、と言われればその通りである。そう簡単に治るのなら他にいくらでも方法はあるし、とつくの昔に解消されているだろう。

「……ですが、今日お会いして。あの手紙は嘘偽りなく、誠意を込めて書かれていたのだと分かりました。そしてここでの経験をきっかけに、それを克服したいという気持ちも」

「末吉さん……」

「せっかくチャンスを掴むために勇気を出してここに來たのに、後悔したくないですよ
ね」

「ですから、お聞かせください。お二人はこのライブラフに入って、何をしたいですか
？」

何をしたいか、か。

「……俺は、俺達は、もうお分かりかと思いますが、人との会話が苦手なんです」

「はい」

「このままじゃいけないと思っただけでも、どうすればいいかなんて検討も付かなくて。ただ時間だけ過ぎていって……」

「……」

「妹に……遥香に、ライブラフの……神輿羅世良さんの動画を見せられて。それがあまりにも強烈で、新鮮で……眩しかったんです」

あの動画を見たときから俺は、心のなかに今までの陰鬱な感情とは異なるそれが渦巻いていた。

「俺は、何をしているんだ。このまま燻っただけでいいのかって、動画越しに、自分に問いかけられた気がしたんです」

「あたしは、そんな兄に……遥斗にただ甘えて、おんぶにだつこで。現状を何も変えようとしてきませんでした。だけど、世良さんの動画を見た瞬間、目の前が開けた気がしました。こんなにも、好きなことで輝いて生きている人がいるんだって」

「……」

末吉さんは、俺達の話に黙って耳を傾けてくれている。その表情は、両親が死んでから見てきた大人たちのどの顔とも違っていい。

ただ、真つ直ぐに。俺達を見ている。

「あたし、この人みたいになりたいって思いました。たくさんの人と、楽しく話せるような。皆を楽しませられるような、そんな人に」

「俺は、やり直したい。このV t u b e rをきつかけに、もう一度社会に出られるような人間になりたい。親に胸張って、自慢できるような人間に」

そして俺と遥香は同時に頭を下げた。

「自分達を、V t u b e rにさせてください！」

沈黙。それは数秒なのか、それとも数分だったか。

やがて末吉さんは、その口を開いた。

「お二人の思い、確かに聞きました。ただ漠然となりたいだけでない、切実な思いを」
それを踏まえて、と末吉さんは前置きして。

「……柳瀬遥斗さん、遥香さん。お二人とも、第三期ライブラフオーデイション、合格です」

合格。

末吉さんのその言葉を噛みしめ。

「……………やつ、た？ やったあ！ 遥斗お!!」

「ああ、やったな遥香！」

合格した。その事実に感極まり、遥香とハグを交わす。

「良かったあ……ホント良かったよおお……ふええええ」

「おいおい泣くなよ」

「だつでええええ……」

「はいはい分かった」

そのまま泣き出した遥香を宥める。末吉さんがすごく微笑ましそうに見ているから恥ずかしいんだけどな。

(はあああああッ!!!! てえてえッ!!!! この二人マジでてえてえの塊やんけふざけんな私を尊みの爆弾で殺す気かッ!? マジで合格させて良かったああ私グツジヨブ過ぎね!?! これは白米だろうが酒だろうが進みますわああうへへへへ)

内心そんなことを考えていたことなど俺達兄妹には知る由もなかった。

母さん、親父。

俺達、V t u b e r 始めます。

#05 準備と期待と、覚悟と。

ライブラフでライバーデビューすると決まっただけからは、あつという間に時間が過ぎていった。

オーディション合格を貰った後、俺と遥香は珠緒さん——本人から気軽に名前で呼んでほしいと言われた——に、デビューするにあたっての注意事項を聞かされた。

不用意な発言、誹謗中傷、個人を特定されるような発言は絶対にしないこと。

周囲の人間に、自分がV t u b e rとして活動していることを公言するのは極力避けること。

分からないことや気になることがあれば、何でも相談すること。

炎上した際は慌てず、冷静に指示を仰ぐこと。

……などなど、まあ活動をする際に注意すべきことを説明された。確かにネットのアンテナサイトでも、度々V t u b e rの炎上記事が載っていることから、やはり相応に気を付けねばならないのだろう。

まあ慎重というか臆病ぎみな貴方達ならそこまで心配はありませんよ、とは珠緒さんの談。

否定はしないけどちよつと複雑だった。会話なんて臆病なくらいで丁度良いのよね。

また、オーディションでは俺達兄妹の他に、三人が合格しているらしく、全部で五人が三期生としてデビューすることだった。まだ他の同期とは顔を会わせていないのだが。

俺達以外の同期は既に顔合わせを済ませているらしい。もしかしたら珠緒さんが配慮してくれたのかもしれない。

その珠緒さんだが、本人曰く三期生の統括マネージャーとしてしばらく働けらしい。それぞれ専属か二、三人を掛け持ちして個別にマネージャーは付けるとのことだが。

珠緒さんは俺達の事情を鑑み、専属でマネージャーを付けてくれるそうだ。彼女には頭が下がる。

そして面接から一週間後。ついに俺と遥香のアバターが完成したとのことで、早速送って貰った。

「これが、俺達の……」

「もう一人の自分……」

そこには、美少年と美少女。

どちらもグレーを主体としたブレザータイプの制服を着用。ライトグリーン色の瞳に、男は黄色と緑、女は赤と青のメッシュが入っている茶髪。

活発で勝ち気そうな表情の女、落ち着きのある男。

名前やプロフィールも一緒に添付されていた。こちらは多分珠緒さんが後から付け足したものでしょう。

「お、おお……」

「な、なんか、いよいよって感じだね」

「もうすぐデビューするんだって実感湧いてくるな」

当日はこのキャラクターを動かしながら配信をするのだ。いやでも緊張と期待が高まる。

今回の三期生には、どうも共通するテーマというものがあるらしい。珠緒さんが言っ

てた。

曰く、『剣と魔法の世界観』。昨今のアニメ傾向などを鑑み、ファンタジー系のコンセプトを推していくのだそうだ。

このキャラクターにメッシュが付けられているのも、恐らくこのキャラクターが得意な魔法の属性かなにかを表しているのかもしれない。遥香なら火と水、俺は風と……なんだろう、土か雷だろうか。

色で魔法の属性だのなんだのが察せられる辺り、自分も最近のアニメに影響を受けてまくっているのだと感じる。

同期もそういったコンセプトを元にしたアバターが送られているらしい。まだ公式のホームページにも情報がないが、大まかな情報だけは俺達にも入っている。

「なんだっけ……シスターと教師と……」

「魔王だったな、たしか」

如何にもなファンタジー設定である。それで俺達は学校の生徒か？ 双子が珍しいだけで設定的には普通だ。

いや普通で良いんですけどね。演技とかあんまり自信ないし。

というか魔王演じる人がすごい。俺だったら魔王とかロールプレイ重要そうなキャ

ラクターでどう立ち回っていいか分からないし。普通に生徒で良かった。

改めて贈られたアバターを見る。

(……これから、長い付き合いになるんだろうか)

あまり愛想は良くなさそうな、落ち着いた表情を見せる少年。俺はもうすぐ、このイラストに俺という魂を吹き込むのだ。

名前を見る。なんだか珍しいというか仰々しいというか、中身が負けてしまいそうな名前を。

(みすのゆうと御簾納優斗、か)

元の名前と殆どかすつてもいないが、それぐらい別人の名前でいてくれた方がかえってやりやすいかもしれない。しばらくは本名とライダー名でごっちゃになりそうだが。

「……………ね、遥斗」

ふと呼ばれて横を見る。

最近はめつきり見なくなっていた遥香の笑顔が、そこにあつた。

「どうした？」

「……………配信、楽しみだね」

「……………ああ」

楽しみ。あの元々あがり症で最近ではコミュ障も加わったぽんこつの遥香が、純粹に楽しみだと言った。

あの遥香が、昔のような笑顔で、なにかに夢中になっていた時と同じような顔で言い切ったことが、自分のことのように嬉しかった。

もう一度、アバターを見る。

さつきよりも、心なしか表情が明るく見えた気がした。

(……………よろしくな、優斗おれ)

配信は目前に迫っていた。

配信当日。

しかしそうしている間にも同期は次々に初配信を終えていき、いよいよ俺達の順番が目前に差し迫っているのだ、ここらでいい加減復活して貰わないと困る。

「というかね、ビックリしたよ。ビックリした。お皿のお豆が飛び出すぐらいビックリした。」

「何がつて、同期が揃いも揃って濃すぎることなんだよ。」

「トップバッターの女教師改め「小鳥遊セレナ」は開口一番「おつすお前ら、元気にセ〇クスしてるか？」から始まり、その後も合間合間に下ネタを挟みながらハイテンションで進めていくトンデモ教師だったり。」

「二番目のシスター改め「鮎川聖」はその清楚な見た目から想像も付かないほどのドS発言を繰り返し、早くも「鮎川イビリ」「毒舌シスター」などとあだ名が付いたり。一番ビックリしたのが魔王改め「ギルバルト五世」の配信だったんだけど。」

「どうも人族の皆々。余は魔界の王、ギルバルト五世であるぞお、よろしく〜」

「つて、威厳あるアバターから嘘のように気が抜けるゆるい喋り方だったんだけど。それなりに低めの渋い良い声でそれだから思わず笑ってしまったんだけど。」

「どいつもこいつも一瞬で爪痕残していきやがったもんだから、配信を巡ってきたリスナーの期待はそりや高まるというもの。」

「これだけ癖の強い奴らの大トリを務める奴って一体どんな……。」と。それはそれわクワクしながら俺達の配信開始を待っていることだろう。やめてくれよ。

「無理い……無理だよ遥斗お……あんな奴らに勝てるような配信思い付かないよお……。」

「弱音吐くなつて言いたいけど同意見だわ……。」

「お前ら期待しないでくれ。こちとらただのコミュ障兄妹なんだぞ。出来ることなら今すぐ逃げ出してえ。」

「……はい、というわけでねえ、余の初配信はここまでだね。次が最後の三期生メンバーだから皆そつちに移動してね、余も見に行くぞ。」

嗚呼、終わってしまう。そして俺達の番が来てしまう。

……ここでええのんか？

：期待

：大トリはどうなるんやろか

：情報何もなかったから正直こわい

：ライブラフを信じろ

：頭ライブラフの何を信じれば良いんだよ

：草

：まあライブラフは良い意味で信じられないの同意

：正座待機

うわあ視聴者さんがいっぱいだあすごいなあ。出来ることなら半分ぐらいこの辺で帰ってくれませんかねえ。

「ほら遙香見ろ、俺達を期待する不特定多数の目がお前を見てるぞ、日本全国から俺達を見てるぞ、コミュ障の俺達がなにをやらかすか期待してるぞほら先陣切れよ」

「おいお前遙斗ふざげんなよ、仮にも妹にそんな役押し付けていいと思ってるのか？

双子だからって何言っても大体予想できるから何言ってもいいだろとかふざけたこと考えてないよな？ おい押すなマイクに近づけるなざっけんなコラくそ兄貴イ!!」

「良いではないか良いではないか、跡継ぎである長兄を生き残らせるため自ら盾となる妹の壮絶な死しほく良いではないかエモいぞ」

「エモいだけで死んでたまるかこのツ、おい離せツ、ちよつ、強、力強えなおい!？」

「兄に力で勝る妹なぞ存在しねえ!」

「てめえ、ふざけんな!　かわい妹妹ちゃんに何するんだよオ!!」

「君はいい妹だったが………君がV t u b e rに誘ったのがいけないのだよ!!」

「謀ったな兄者アアアア!!!」

あーもうこんなことしてる間にもガンガン時間は過ぎていくのだ。現に俺達の配信開始までもう2分もないぞ。

と、その時、珠緒さんからのL i m e が来た。

ちなみにL i m eとは無料でチャットだとか通話が出来るアプリのことである。前に気軽に連絡できるような珠緒さんにとID交換してたの忘れてた。

『貴方達らしく、楽しんで配信してください!　失敗なんて気にしないで!』

そんな拙いながらも、珠緒さんの真つ直ぐな気持ちが届くようなメッセージ。

俺も、遥香も、その文面を見て、少しの間無言になった。

次いでSNSの通知が立て続けに三件。いずれも同期のセレナ、聖、ギルバルトからだった。

『愛しの教え子達ー、見守ってるぞー』

『お二人の配信の成功を、影ながら祈っております』

『リラックスだぞ〜。余も見守っておるからなあ〜』

「みんな……………」

「……………」

珠緒さんが。やっと俺達が信じられそうな大人が、俺達を信じてくれている。

俺達の同期が、SNSで俺達を応援してくれている。まだ顔も見たことのない俺達を。

「……………遥香、やるぞ」

いつの間にか、緊張も震えも、何処かに吹き飛んでいた。

「……………うん。やろう、遥斗」

繋いだ手に、迷いがなくなった。

「……………配信するぞ」

「うん」

画面を、切り替えた。

さあ、やろう。

#06 双子系V t u b e r、はじめました。く

待機画面から配信画面に切り替える。

俺と遥香のもうひとつの姿、「御簾納兄妹」が画面に映し出され、それぞれの動きに合わせてあつちを向いたり、こつちを向いたり。なんだかぎこちない。

動作確認の時にも見ていた筈だが、いざ本番となるとよりぎこちなくなつたような気がする。緊張しているからだろうか。

：きちや！

：始まった

：え、二人？

：4 枠だから4人かと思つたら5人なのか

：5人揃つて四天王！

：二人で一枠は珍しいな

コメント欄が早速盛り上がりを見せる。まあ最初から二人でっていうのは珍しいよ

な。

おっと、マイクをオンにしないと。最初は音量を少し小さめにして、視聴者のコメントを見ながら調整すると良いって珠緒さんが言ってた。珠緒さんに頼ってばっかだけどこればかりは仕方ない。

「よし遙香、俺が調整するからお前声出せ」

「あたし？」

「視聴者サービスだよ、楽しませてやれ」

「自分ばかり。まあ良いけどさ」

渋々といった感じだが、マイクに顔を近づける遙香。簡単に合図を出したと同時に、マイクのスイッチを入れる。

『あー、あー……聞こえてるかな？ マイクの音量調整するから、大きかったり小さかったりしたらコメントお願いしまーす』

…はーい

…ちよつと小さいかも

…声良いね、かわいい

…男の方なにやってんの？

『今隣の男が音量調整してくれてるよ。……………どうだろ、良さそうかな？』

…k

…k

…良いと思う

…今ぐらいじゃない？

……………どうやらこれぐらいで丁度良さそうだ。次回からはこの位置で登録しておこう。

遥香にOKサインを出し、続いて挨拶へと移る。

『ん、良いみたいだね？ よし、じゃあ改めて初めましてー！ ライブラフ三期生、トリを務めます！ 妹の方、御簾納里奈って言いまーす！ それとー？』

『初めまして。同じくライブラフ三期生としてデビューいたします、兄の方、御簾納優斗

と申します』

『はい、というわけですね！ まあ名前で察してる人も多いと思いますが、あたし達は恐らく業界初？ の、双子のV t u b e rです！』

『二人で一枠のライブって珍しいんじゃないか？』

…双子!?

…兄妹で同時デビューとか見たことねえ

…ライブラフまたやってんねえ！

…兄妹揃って顔も声も良いとか最高やん

…既に面白い

…あのメンバーの大トリとか一体どんな逸材なんや……

…そうどうせやべーやつなんだから騙されないぞ

うーむ、みんな同期の印象に引きずられてるな。珠緒さん何を思ってあの人達と同期にしようと思ったんだ。いじめ？ いじめなの？ 絶対違うだろうけど。

『いやあ……あれらには敵わないよ』

『揃いも揃って濃すぎて俺らのハードル上がりまくってたもんな……勝てる気がしねえよ』

『あたしたちなんてフツーだよフツー……ていうかむしろコミュ障気味だし』

『こんななりしてるけど陰キャ寄りなんだよ……相対的にマトモ枠だな、うん』

：初配信で同期をアレ呼ばわりする兄妹

：言われても仕方ないと思うんですけど（凡推理）

：本当のコミュ障はそんな流暢に喋れない ソースは俺

：ええ〜本当にござるかあ〜？

小鳥遊セレナ：オイオイ心外だなあ

鮎川聖：わたくしそんな人間ではありませんよ？

ギルバルト五世：こう見えて良識はあると思うんだがなあ〜

：草

：同期もよう見とる

：味方いなくて草生える

『言つとくけどマジだかんね!』 あたしもう配信直前なんか吐きそうなほど緊張してた

しー』

『はいぼくそんな妹を矢面に立たせて自爆させようとしてましたー』

『兄貴は兄貴でこんなだしよお！ 実質あたしが孤軍奮闘してんだわ！』

『マジかよその兄貴って奴サイテーだな』

『お前じゃい!!!』

：妹早くもぶちギレで草

：何で兄貴そんなに他人事なんだよwww

：自分でできてえらい

：そういうことしないのが一番えらいと思います

：喧嘩しないで

うん、掴みは上々かな。遥香に合図を出す。

『……えー、このままだとずっと雑談してて進まないの、次行きます。次はですね、あたし達のプロフィールを紹介したいと思います』

『俺達ってどんな人？ っていう感じの事が書いてるんで、それを読み上げます』

『画面にも出すからねー、というわけではいい、ドン!』

遥香の掛け声に合わせて、あらかじめ用意したプロフィール画像を表示させる。

『名前はさつきも言った通り、兄の方が御簾納優斗、妹の方が御簾納里奈って言います。中央魔道学院高等部に通う17歳の高校生です』

『学院の入学者が少なくなってきたから、生徒数を増やすための宣伝をすることになって、それに選ばれたのが俺達です。V t u b e rはその手段の一つってことだな』

『……まあそれは建前で、本当は学院の外に友達を作りたいんだよね』

『ほら、生徒が少ないって言ったじゃん？ アレ皆が想像してる以上に少なくてさ……一クラス10人も居ないんだよね』

『マジで学院存続出来るかどうかの瀬戸際なんだけど、それ以上に友達少なくて……』

：限界集落の分校かな？

：もう（その学院に未来）ないじゃん

：切実すぎて笑えない

：生徒に背負わせるには重すぎじゃね？

…学院の命運を背負う生徒がコミュ障とか人選ミスでしょ
…ダメみたいですね……

『そんなわけで、皆と友達になりたいって思って思ってたデビューしたんだ』
『友達になってくれる人はチャンネル登録よろしくね!』

ちら、と登録者数を見してみる。早くも三桁か。開始十分でこれは良いペースなんじゃないか？

『んで次はタグを決めていこうと思うんだけど、何が良いかな』

…リスナーはクラスメイトでいいんじゃない？

…いいな

…友達だとちよつとくくりがでかいしな

『クラスメイトいいね、それにしよつか』

『配信、ファンアートとかのタグも決めなきゃな』

：放送部とか新聞部みたいに広報活動とか？

：美術的な感じでモデルデッサンとか

：活動記録

：隠し撮り御簾納

：響きが厭らしいからダメだろ

：未成年だからえっちなのはいけないと思います

：暖簾の向こう

『にやははははっ!! 暖簾の向こうって!』

『確かに男子にとつちや夢のエリアだよな、暖簾の向こう』

『おっけーおっけー、暖簾の向こうで採用ね! 優斗はともかくあたしは検索で弾く

よー』

『俺はともかくってなんだよ』

：兄貴はともかくってw

：兄は見ると思われてて草

：男ならそんなもんだよな

：だが待つてほしい男がわざわざ自分と妹で抜くだろうか

：ま、まあ妹ではワンチャン

：後々気まぜくならないかそれ

まあ確かになあ。兄妹モノとか一杯あるしな。

『自分でも妹でもオカズにはならないな俺……』

『妹の前で公言するのもどうかと思いますが』

『だって正直さ、男の自分で抜くか女になった自分で抜くか、って言われてるようなもんだし……』

『……あー、まあ、うん、そうか』

：それで納得しちゃうんだ……

：ここからは兄妹というか双子独特の感覚かもしれん

：でも自分が女になったとしたらそれはもう……

『なんか変な話になってきたな？ よしこの話やめようハイやめやめ！』

『とりあえず配信タグは「#活動記録」、ファンアートは「#御簾納のモデルデッサン」、えちちな方は「#暖簾の向こう」で。あんまり変なもの描いちゃダメだよー？』

際どい話になりそうなので少し強引だが話を切り上げ、タグ決めに終了させる。

本来ならば配信中の予定はここまでなのだが、終了予定時間までまだ時間が残っているため、急遽リスナーのコメント欄から質問を拾って回答して時間を潰すことになった。

：リアルに双子なの？

『リアル双子だよー。リアル優斗が兄なのも一緒』

『ちなみにライバーになったきっかけは妹に誘われたからです』

：普段一緒に過ごすことある？

『今も実家に同居してるぞ。よく映画とか一緒に見る』

『家事炊事は曜日ごとに分担してるよー』

『まあ料理は俺が専属なんですけどね』

『出来ない訳じゃないけど優斗の方が上手いんだよなあ』

：発言がシンクロとかする？

『『あんまりない』』

『あつ』

『被った』

：草

：草

：双子要素出していけー？

：妹さん、お兄さんと結婚させてください

『は？ あたしから兄を奪う気か？』

『キレるなよ』

：草

：ブラコンかな？

：じゃあ妹さんをください！

『は？ 命が要らんのかお前』

『そつちもキレてんじゃん』

：シスコンやんけ！

：どつちもどつちやな

：てえてえ

：好きなライブーは？

『神輿羅世良先輩かなあ』

『ライブーになろうって思ったの、世良先輩見てからだよね』

：姐さん慕う後輩ができて良かったなあ

：まさかの姐さん

：尊敬の対義語の姐さんに後輩が……

神輿羅世良：お前ら覚えとけよ

：ヒエッ

：やっべ姐さんきとるやん

：後輩にカチコミっすか？

『あつ、世良先輩来てる!?!』

『初めまして先輩! 御簾納兄妹です!』

神輿羅世良：後輩たちよろしくなー! あと若衆後で集合

：ヒエッ

：いのちばかりは

：ゆるして

：いやじゃしにとうない

：もう詰める指ないっす

：ドラ○もんニキかあいそ

：ぶつちやけ何歳まで一緒に風呂入ってた?

『え、小三ぐらいじゃなかったっけ?』

『嘘つくなお前、小六まで一緒に入ろうとしてぐずってたじゃねーか』

『ツスウウウー……………』

…迫真の吸い込み

…小六で男女一緒にお風呂はちよつと……

…妹のブラコン度合い重症じゃね？

…仲が良くてよろしい

…仲良いどころではない気が

『兄貴だって初恋の子にフラれたとき「びえええ里奈アアア」って泣きついてきたじゃん』

『それ幼稚園の頃の話だろ……』

『ちなみにだけどその初恋の子さ、今アフリカでお医者さんやってるらしいよ』

『マジで？ 初耳なんだけど』

『マジ。ほらホームページのここ』

『……うつわマジじゃん。あの子すげえ立派になったなあ』

『ホントだよねー……それに比べてあたしら……』

『V t u b e rとか何やってんだろうな……』

…変なとこでダメージ入ってて草

：まあ命を預かる仕事と比べたらな

：Vも今はちゃんとした仕事ですよ！

：学校救うとか英雄やん？

：フオローされてるの草

：切り替えていけ

その後も二、三質問を返したところで、予定していた終了時刻を迎えた。

『じゃあこの辺で、あたしたちの配信を終わろうと思うよ』

：おつ

：楽しかったよ

：いかないで

『今日は三期生お披露目配信に参加してくれてありがとう！三期生のこれからを是非とも見守っていてください！』

『そしてチャンネル登録もよろしくお願いします。改めて皆さん、今日はお疲れさまでした。そして次回の配信でお会いできることを楽しみにしています』

『それじゃあ皆、ばいばーい!』

『宿題して歯あ磨いてお風呂入ってあったかくして寝るんだぞー』

『ド○フかな?』

『また来週〜〜!』

『ドリフやんけ!!』

『ハハハハハッ、皆またなー』

∴おっ!

∴おっ

∴またなー

∴チャンネル登録したわ

∴また明日な!

配信を切る。そのまま遙香と目を合わせ、

「ツ、はあああああああ〜〜〜……………」

盛大にため息をついた。

「あ〜緊張した……もう無理」

「これからもこれ続けてかなきやなのか……」

「そうだね……ホント疲れた」

俺も遥香も疲労困憊といったところ。確かに顔を直接合わせて会話している訳ではないから、そういったコミュニケーションの面は幸いにして出てこなかったのだが。

それと配信を無事に終えることは話が別だ。今日はお互いうっかり本名で呼びそうになったことが何回かあるし、そうでなくても配信に關しては不馴れというかずぶの素人だ。はやく慣れていかないといつかやらかすぞこれ。

ライターってこういうところに常に気を遣わなきゃいけないし、それでいて無言でいるのは放送事故。途切れさせず、口を滑らせず。これを両立させるのが思った以上に難しいのは分かった。

「次からの反省にしないとな」

「うん、あたし何回遥斗って言いかけたか……」

「俺も所々進行に詰まったところがあるしな。次はそこも改善していくぞ」

「ういー」

ともあれ、ひとまず無事に終わって良かった。今日はこれで終了……と思ったのもつかの間。

「……あれ？ Wishcordに通知？」

「あん？」

「……あ、これ珠緒さんからだ」

ちなみにWishcordとは、PCやスマホなどでリアルタイムにチャットやゲーム配信が出来るアプリケーションである。今のところ三期生合同のコミュと、ライブラ全体のコミュ、そして珠緒さんとの個別コミュの三つに入っているが、通知はどうか三期生のコミュからのようだ。

「珠緒さんなんて？」

「……初配信の反省会するから、ボイチャ繋げて入ってきてって」

「……嘘だろ？」

「こんな嘘ついてどーすんのさ……」

一難去ってまた一難。今度は同期とボイチャ越しの会話をこなさなければならぬ

らしい。

母さん、親父。コミュ障治すのって、大変なんだね。俺知らなかったよ。

泣きたい。

#07 反省会で本当に反省してる奴いない説

何故、人は言葉を交わすのか。

地球に生命が誕生して以来、これほどまでに多種多様な鳴き声を操り、コミュニケーションを図る生命体は、ホモサピエンスという霊長類の中でも体毛を失った変なサルの仲間以外にはいないだろう。

ヒトは仲間との情報伝達を円滑にするため、備わった声帯とグネグネと動く口や舌を巧みに使い、「言語」というコミュニケーションツールを編み出した。

そして火を味方に付け、道具を生み出し、徒党を組んで大物を狩り、やがて数を爆発的に増やし、社会性を学び、今日の地球の大半を闊歩する、二足歩行の変なサルの仲間。身体能力など、様々な面では、かのネアンデルタール人に劣っていたホモサピエンスが唯一勝っていたのは、「群れ」を苦しめない社会性、そして当時最も洗練された言語を操ることだったという。

つまり何が言いたいかというと、だ。

「兄者ああ……妹者はもう帰りたいのじゃああ……」

「落ち着け妹者……ここが我が家じゃ……」

「何でわざわざコミュニケーションなどといふまだるっこしい方法をとらねば人間は意志疎通がとれぬのじゃ……」

「全くもつてその通りである。げに恐ろしきは人間の群れに対する忌避感のなさよ」

「なんと恐ろしきかな」

「恐ろしい」

「くわばら」

「くわばら」

現時点で、同時期にデビューした同期とのコミュニケーションを恐怖し、回避しようとする我々柳瀬兄妹は、ホモサピエンスとして異端であるということなのだ。なんでテレパシーとかそつち系のコミュ方法を伸ばそうとしなかったのですか我らが祖先よ。

嗚呼、何が悲しゆうて見ず知らずの他人と、サウンドオンリーとはいえ言葉を交わし、あまつさえ親交を深めようとしなければならぬのか。これが社会の洗礼か。コミュニケーションにとつては決して脱せぬ迷宮^{ラビンス}。正解があるかも分からぬ選択肢を常に選ばされ続け

る会話地獄。ゴルゴタ 神よ、エリ・エリ・レマ・サバクタニ 何故我を見捨てた。

要約すると「話したくないでござる！ 絶対に話したくないでござる！」みたいな感じである。我が儘と言うなかれ、これがコミュニケーション障を拗らせた奴の思考回路だ。

こんな現実逃避を続けていても解決しないのは重々承知ではあるが、思い返してほしい。我が同期共のキャラクターの濃さを。下ネタフルスロットル教師と清楚の皮を被った腹黒ドSシスターとゆるキャラ魔王という個性お化け共を。

たかが双子であることが唯一の強みである、吹けば飛ぶような貧弱個性の俺達にどう対抗せーっちゅーねん。かち合う前から白旗掲げて華麗に被害スルーするしか道はない。没個性と呼ばれてもこの際気にするか。なにがなんでも平穩にやり過ごしてやる。

……などと不平不満をつらつらと書き連ねてみたはいいが、それで解決するわけでもなく。

「遥香、いい加減ボーイチャ繋げるぞ」

「ふええ……お兄ちゃん厳しいよう……」

「いい年してぶりっ子は痛いだけだからやめろ、俺も居たたまれなくなる」

「うるせーやい、もうボーイヤでもボーイパでも何でも来いってんだバーローテヤンデー
チクシヨーム」

「チ○太かおめーは」

自分なりに緊張を解そうとしているらしき愚妹の狂言を話半分に聞きつつ、W i s h
codeのボーイヤを起動する。

『あ、やっと来たあゝ。やつほおゝ、聞こえてるうゝ?』

マイクの電源を入れ、音量を確認していると、先に入っていた同期のうち一人に声を
かけられた。

……………かけられたはいいが、誰だ? 少なくとも俺達が知る同期に、こんなゆるふ
わテンションな女声の持ち主はいない筈だが。え、マジで誰?

『あゝそつかあ、直接話すのは初めてだもんねえゝ。』

私、小鳥遊セレナだよぉ〜』

……………なんですつて？

『はあああああ!?!』』

俺と遥香の絶叫がシンクロした。

いや、ちよつと待つてくれ。小鳥遊セレナって、あの下ネタ全開女教諭だよな？
口
を開けば放送コードに引つ掛かりそうな発言連発するあの小鳥遊セレナだよな？

その倫理観ゆるキャラで、女性としては低めのハスキーな声のお下劣教師の中の人
が、こんな下ネタのしの字とも無縁そうな存在感ゆるキャラ声の人と同一人物だつて？

『あつはははははは！ やっぱギャップがすごいよねえセレナの中の人のキャラってさ

！』

『まあ僕たちが言えた口ではないんですがね』

そこへ更に別の女性の声、続いて男性の声。男性は口調こそ異なれど、独特な低い音域の声の特徴そのままだったので察しはつくのだが、もう一人のなんだか鼻にかかったような癖のある女性は、まさか……………。

『……………あの、もしやとは思いますが』

『ああうん、自己紹介がまだだったね！ 初めまして、自分は鮎川聖だよ！』

『そしてお気付きかとは思いますが、僕はギルバルト五世です』

『『嘘だろ!!』』

いや全員が全員ライバーと全然キャラが違うってどう言うことだよ!! 下ネタ女教師がゆるふわで、腹黒ドSシスターが快活元気系で、ゆるキャラ系魔王に至ってはなんでそれでやらなかったと言いたくなるほど落ち着きのある理知的な口調って!! 頭バグるわ!!

『……………どうも、御簾納優斗の中の人です』

『御簾納里奈の中の人です……………』

それに比べて俺達のキャラクター性のなんと捻りのなさよ！ ザ・没個性！ 平々凡々普通ストレートど真ん中！ 見てくれも中身も全くとっていいほど個性がない俺ら！ 逆に個性になるかもしれないという逆さや状態！ どうしてこうなった！！

『おおく、生の御簾納兄妹ボイスだあ、そのまんまだあ〜』

『どちらかと言えば自分等がキャラ作りすぎだな！』

『まあそうしないと、地が出てズルズルボロが出そうですからね。彼らの立ち回りが上手いんですよ』

これ、誉められてることでもいいのか？ というか俺に言わせてもらえれば、ライブと素で全く違うキャラクターを演じられるあなた方のほうがよっぽど凄いと思うんですけど。

『演じるのって結局疲れますからねえ。こればかりはもらったアバターの方向性ゆえ、仕方ないかと』

『セレナの見た目と私じゃあ、キャラが違いすぎるから違和感出るんだよねえ。でもお、練習したから演技は自信あるんだあ』

『自分はセレナが聖やった方がいいんじゃないかと思うんだけどね。まあこれも経験だと思つて頑張るさ』

『なるほど……………あれ？ でもギルバルトさんは素のまままで十分いけると思うんですが、何故あんなキャラに…………』

『僕も最初はそうしようと思つたんですが…………ほら、お二人と違って、我々はあらかじめ顔合わせをしているので、素の状態を知っているものですから。今日の配信での演技を見せられると、僕も捻りを入れねばと思つてしまい、思わずあんなキャラに…………』

『……………これから大丈夫そうです？ それ』

『早くも後悔してきました…………早々にキャラを変えるかもしれないですね』

ギルバルトはどうも良識はあるようだが、どことなく流されやすいらしかった。

と、ここで最後の人物がボーイチャに入ってくる。我らが珠緒さんだ。

『お集まりですね皆さん。では、三期生初配信の反省会……………という名の打ち上げを始めていきましよう』

『わ〜』

『どんどんばふばふー!』

『ええ……………』

なんか唐突に始まったんだけど。なに打ち上げて。

『まあ打ち上げというか、優斗さんと里奈さんのお疲れさま会みたいなものですね。お二人の事情を鑑みて、他の三人といきなりの顔合わせは難しいと判断しました』

『ああ、だからか……………あたし達除け者にされてるのかと思っちゃった』

『滅相ありません。お二人の負担が減るよう配慮したつもりだったのです』

実際有り難かった。面接の時の珠緒さん一人であの調子だったのだから、三人も初対面の人間がいたらパニックになっていたかもしれない。

『それで、今日の配信後に、皆さんの時間を少しだけ割いていただきまして。まずは顔は出さず、声だけで慣れていってくれれば、と』

『聞いたら二人が最年少だったんだよね。だからまあ年上としてリード出来たらなーと』

は思うよ』

『うん、お姉さん出来るかは分かんないけどお、気軽におしゃべり出来るぐらい打ち解けたいなく、つて』

『僕が最年長なんですよね。中身は冴えないおっさんですが、何かあれば相談に乗りますよ』

『みんな……』

顔も知らない人たちが、今日会ったばかりの俺達を気にかけてくれている。それは素直に嬉しかった。

実際はどうだか知らないが、という余計な注釈をつける俺の心。そういうところだぞ俺。警戒心MAXじゃ打ち解けられる訳がないだろ。

『じゃあ、改めて自己紹介するねえ？ 私は小鳥遊セレナをやってる、棗凛花なつめりんかって言います。21歳の大学生だよ』

『自分は鮎川聖改め、金生美咲かのみさき。歳は25、普段はジムのインストラクターやってるよ』

『僕は丹生俊輔にぶしゆんすけ、ギルバルト五世を演じています。脱サラして小さい喫茶店をしている38歳。近所のおじさんぐらいに思ってくれたら嬉しいですよ』

各々が本名と職業を明かしてくれた。大丈夫なのかと思つたが、珠緒さん曰く「事務所と同僚には明かせる範囲で明かしても大丈夫ですよ」とのこと。まあ仮にも企業なんだから情報保護はしっかりしているだろうし、俺達もそれに倣おう。

『えっと、俺は御簾納兄妹の兄の方、御簾納優斗改め柳瀬遥斗です。今年成人しました。今は外部委託の事務作業をやっています』

『御簾納兄妹の妹の方、御簾納里奈改め柳瀬遥香です。今年成人した家事手伝いです』

『ニートとも言ふな』

『やめろお気にしてんだよお！』

俺達の挨拶で笑いが起こる。うん、何とか会話できているのではなからうか。

『ちなみに、皆さんがライバーになつた理由ってなんですか？』

『私はあ、たまたまオーディションを目にして、面白そうだったので』

『自分は友達に勧められたんだよね。まさか本当になれるとは思ってなかつたけど』

『僕は元々Vuberファンでして、自分も近いうちにやってみようと思つていたんで

すよ。丁度オーディションがあつたので、これ幸いと』

丹生さんが一番意外な理由だった。まあそうじゃなきや喫茶店と二足のわらじなんて履かないか。

『柳瀬くん達はどうしてライバーになつたんだ？』

『……あー、その』

『コミュ障を、治したくて？』

『コミュ障……ですかあ？』

金生さんの質問に出した答えに、棗さんが少し困惑した声色を出す。そりゃあよく分からんわなこんな理由。俺が棗さんの立場でも戸惑う。

『まあ、色々あつて人間不信になりました。コミュ障はその時併発したというか』

『でも、このままじゃダメだつて思つて。世良先輩の動画見て、あんな風になりたいって思つたんです』

『そつかあ。うんまあ、深くは聞かないよ』

『人それぞれ事情がありますからね。言いたくないことの二つや三つ、みんな普通に持っていますよ』

僕も色々ありましたし。丹生さんはそう言って穏やかに笑った。脱サラして喫茶店のマスター、そして今度はV t u b e r。彼の言葉の重みはその人生にあるのだろう。

『私、丹生さんのコーヒー飲んでみたいなあ。お店どこにあるんですかあ？』

『原宿ですね。小ぢんまりとした店なので見つけにくいかもしれませんが』

『全然近いじゃないですか！ 絶対行きますよ！』

『原宿なら自分も職場が近いし、顔出しますよ』

『はは、まだまだ半人前なので、味には期待しないでくださいね』

おおう、あれよあれよという間にコミュ強どもが会う約束取り付けたぞ。昔は俺らもこんな感じだった筈なんだが今や見る影もなし。

『柳瀬くん達も来るでしょお〜？』

『お、俺達もですか？』

『そりゃあもちろん、同期なんだし、ちゃんと会ってお話ししようよお』

『自分も会いたいなー。珠緒さんから聞いたよ、二人とも美人でめっちゃ顔がよくてイケメンで美少女なんだって?』

『……珠緒さんあたし達のことそんな風にいつてたの?』

意味重複してないかそれ。

『僕はもちろん構いませんよ。店では皆さん同期である前にお客様ですから。遠慮せずいらつしやつてください』

『あ、はい、それはもちろん』

『じゃー決定ね! 今度の日曜でいい?』

『私は大丈夫ですよお』

『珠緒さんも是非いらしてください』

『あ、ではお言葉に甘えて。オススメはありますか?』

『パンケーキセットは自信がありますよ。他にもナポリタンやドリアなど』

『あ、ドリアいいなあ、食べたくなってきたあ』

『お腹空いてきちゃったな……あー、チートデイはまだ先なのに……』

さらつと珠緒さんまで誘っていく……これが……コミュ強……! 俺ら全然入って

いけねえ……！

その後もただ質問に答えるだけのAIみたいな状態となった俺と遥香だった。こちらから質問を投げることはなかった。下手なことと言って場の空気を壊したくないんだもの。

それでも今週末に、顔合わせを兼ねて丹生さんのお店に行く約束はできたのでよし。顔は知らないけど声だけでも知っていると少し気が楽だ。珠緒さんもいるしどうにかなるだろう。

『それじゃあ僕はこの辺で。お店の準備をしないと』

『はあくい、丹生さんお疲れさまあく』

『お疲れー！ 自分もそろそろ寝るよ』

『では今日は解散ですね。皆様、お疲れさまでした。これからもよろしく願います』
『あつ、お、お疲れ様でしたー！』

『に、日曜楽しみにしてます！』

『待ってるよー。それじゃあ、お休みなさい』

『おやすみい〜』

通話が切れる。

俺と遥香は目を合わせた。

『つつつはあああああゝゝゝゝ………』

本日二度目の盛大な溜め息をついた。

『疲れた………マジで疲れた』

『もう今日は寝よう……』

疲労困憊である。これ程他人と話したのは久しぶりだ。

こんな調子で本当に大丈夫なのか日曜の顔合わせ。同期は皆いい人そうだったけど、単純に会話のテンポもテンションも違いすぎて疲れる。

以前は俺も遥香もこんな感じで会話していた筈なのに、コミュ障とはかくも厄介なものか。これで社会復帰という大目標は達成できるのか。

「兄者よ……やはりコミュ障を治す道のりは険しいな」

「そうだな妹者よ……」

「げに恐ろしきはコミュ強どもの会話に物怖じせぬ胆力よ」

「まったく恐ろしい」

「恐ろしい」

「くわばら」

「くわばら」

二人でもう一度溜め息をついた。

会話って難しい。

#08～二回目だから大丈夫とかそんなことはない(前)

〽

配信前。待機所には早くも数十人程が訪れて、各々がコメントをしながら配信を待っている。

：正座待機

：雑談楽しみ

：わくわく

：お前から落ち着け

：これが落ち着いていられるか！

：キレるなよw

「うわあ、すごいコメント数」

「ありがてえと同時に怖いよな」

「あたし達を待つてくれてる人がこんなにいるって、なんか不思議だよね」

「それだけ俺らのやらかしを期待してるんじゃない」

「ネガティブ思考やめーやあたしまで巻き込むな」

「だつてさあ三期生で一番キャラ薄くてコミュ障な俺らがこんな期待されてるとかおかしくね？ 絶対なんかあるってこれ、炎上ネタ期待されてるって」

「そういうのやめてよマジでえー！」

「いっそのこと炎上系Vとかになつた方が結果的にキャラが立つて視聴者もコメントも増えて万々歳なのは」

「それ確実に何か大事なもの失つてるよ!? おい正気に戻れ兄貴イ!!」

今日は珍しく俺の方がナーバスになっていた。

いや、何があつたつて訳でもないんだけど、なんていうかこう、あるやん？ 今日気分が優れないとか、なんか調子悪いなつてとき。あれがやたら強く出てくる時期つてさ、あるやん？

多分原因は今日の配信のことだと思ふ。だつてさ、雑談配信つて言つてもさ、なに話せばいいの？ つてなるじゃん。

他愛もない話を延々と続ければ配信として成り立つのか？ なんの面白味もないあ

ひとしきり騒いで落ち着いた。莫迦みたいと思うでしょ？ でもこれが俺らなりの落ち着き方なの。

近所迷惑？ それはそうね、お隣さんごめんなさい。まあ防音しつかりしてるマンションだから気にしたことないんですが。

「よし、じゃー配信するよ」

「おっしややるぞ」

「んでは、ポチっとな」

やりますか……二回目の配信。

『みんなー、こんばんわー！ 御簾納兄妹の雑談配信によろこそー！ 妹の方、御簾納里奈です！』

『歓迎しよう、盛大になー！ あ、お茶とお茶請けは各自セルフサービスです。兄の方、御簾納優斗です』

：きちや！

：こんばー！

：セルフサービスは草

：お酒はお茶に入りますか？

：入るわけねえだろ酒だぞ

：つまみはお茶請けになるだろ！

『はいはいお酒とつまみでもオツケーだから。変なところで争わないようにね』

『ククク争え……もつと争え』

『そこ煽らない！』

『些細なことで争うなど人は愚かなものです……特にお前』

『おつとこつちに流れ弾が飛んできたなあふざけやがって喧嘩か!? やってやろうじや

ねえかこの野郎オ!!』

『ね? 愚かでしょ?』

『アツコラー!? スツゾテメツコラー!!』

：草

…流れるような扇動で草

…ヤクザやんけ!

…血の気多いなこの兄妹

…リスナーそつちのけで喧嘩は草

…兄妹喧嘩やめてもろて

…ライブラフは殴り合いしてナンボなところあるから

…なんで身内というか肉親。で殴り合う必要があるんですか（正論）

…よしこれを肴に酒飲もう

…江戸っ子がいますね……

うん、掴みはオツケー。毎回こういう感じで小ネタを挟めばいいかもしれない。

『はい、血の気が多い愚妹はほつといてですね』

『オイイ!?!』

『今回はタイトルにもありました通り、皆さんとのんびり雑談していこうと思います。ましまろに寄せられた質問とかにも答えたりするぞ』

『ふつつーに進行しやがったコイツ……はい、そういうことなので皆のんびりまったり

『していいこうね』

ちなみにだが「ましまろ」とは匿名でメッセージを送れるサービスだ。悪意のある物はAIが自動で弾いてくれるので便利。

『とりあえずねー、三期生の初配信どうだった？』

：いやー（濃すぎて）きついっす

：やっぱり頭ライブラフなんですわねえ

：いいキャラしてました（最大限言葉を選んだ表現）

：よく教師になれたなって

：僕は聖様の奴隷になりました

：魔王様は声質と口調のギャップが面白すぎた

『だよなあ、みんな癖がありすぎてビビったわ。俺らこんな奴らと同期なの？ って』

『運営のイジメを疑ったよね。あたしらが何をしたんだって』

『普通に挨拶しようとしてた俺らが完全に霞んだよな』

『実際今のところ同期の中でも登録者数一番少ないからね』

…いや逆にさっぱりしてて助かった

…正直濃すぎて胸焼けしてた

…豚骨ラーメンの後のルイボス茶みたいな存在

…一〇堂かよ

…相対常識人は草だった

…三期生を料理で例えたら御簾納兄妹は浅漬け

『だはははっ！ 浅漬けってw』

『ちよつと酢に漬けただけのもんを料理って言っついていいか微妙じゃない？』

『いやいや立派な料理よ？ 俺浅漬け好きよ？』

『いやあたしも嫌いじゃないけどあたしら浅漬けでいいの？ せめて糠漬けにならない？』

『いや漬け物から脱しろよwww』

…大して変わらんやんけ！

…漬け物の呪縛からは逃れられぬ……

…友達作りに来たたら漬け物扱いされる奴がいるらしい

…パワーワード過ぎる……

…ただし漬け物、テメーはだめだ

『んでまああの初配信の後ね、三期生でwishcordに集まって反省会というか打ち上げしたんだよ』

『あたし達以外はもう顔合わせしてたんだけど、あたし達はコミュ障云々の関係で会ってなかったの』

『だから声も顔も知らなくて、通話繋ぐまで心臓バクバクだった』

『このまま死ぬんじゃないかなって思ったよね』

…重症だわ

…拗らせてんねえ！

…まあ気持ちちは分かる

『でもいざ繋いでみたらねえ………いやまさかね』

『あの人たちがまさかね……』

『あんまり言うとか営業妨害になっちゃうんで言えないんだけど、すごいいい人達だったの』

『セレナは特にビビった。全然違う！ つて』

『まあリアルでアレだったらガチでヤバい人だから当たり前なんだけどさ、それはそれで何故そんなキャラにしたんだよって感じですか？』

『いやほんと謎だった。何がどうしたらああなるんだ……』

『素の声聞いたけど本気で誰だか分かんなかったし、名前聞いても全然一致しなかったよね』

『聖もギルバルトもそんな感じで頭バグった』

『思わず叫んだよね、嘘だろって』

『まさか中の人があんな……あんな』

…草

…そんなキャラ違うんか

…まあリアルでもアレだったらヤバいのは同意

…すげえ気になる

…うわあ素の声聞きてえ

…気になりすぎて夜しか寝れなくなりそう

…ちゃんと寝れてえらい

『あ、ギルバルトはちゃんと渋い声のおじさまだったから皆安心していいぞ』

『うん、おじさんっていうかおじさま』

…やっぱり？

…よかった安心した

…素であんな感じじゃないなら普通にイケおじでは？

…解釈一致

…それ言って大丈夫？

『なんかセレナと聖に引つ張られてあんな感じにしたけどもう後悔してるらしいよ。早々にキャラ変えるかもって言ってた』

『まあ遅かれ早かれ変えると思うし大丈夫。本人にも許可取ってあるから』

：草

：草

：ワロタ

：魔王様かわいい

：楽しみにしとこ

うんうん、やっぱ配信裏のネタって気になるよな。丹生さんに許可取っておいてよかった。

その後もコメントに書かれた質問に何度か答えつつ、配信は続く。

#08～二回目だから大丈夫とかそんなことはない(後)

⤵

リスナーからの質問に答えていき、ふと時計をみると、予定していた時間を少し過ぎ
ていた。まあこのぐらいなら許容範囲だろう。遥香に合図を出して次の予定に移る。

『んじゃあ次はましまろ返していこっかー！ 皆投稿ありがとねー！』

『早くも沢山のましまろが投げられました。皆さんありがとうございます』

『いないとは思うけどくそまろ投げたりしてないよねー？』

…ギクツ

…いやいやまさかそんなハハハ

…よもやよもや

…そんなことしてナイアルヨ？

…どつちだよ

『おやあく？ 怪しい奴がいつばいいいなあく？』

『別にくそまろも面白かったら返していくけど、あんまりにもあんまりなのは弾いてるからな』

くそまろとは文字通り、AIに引つ掛からない程度の変な書き込みをしましたまろのことである。余談だが一期生にも一人くそまろを送り付けられまくる人がいるのだが、あの人は捌き方が上手いので、そのリアクションを期待されてまくそまろを送り付けられる悪循環に陥っている。

『ちなみにくそまろ担当は里奈だからな』

『ちよつとお兄さま？ 妹ちゃん何も聞いていませんことよ？』

『おう、今初めて言ったからな』

『え、何？ 優斗なんでそんなことするん？ 妹をそんな地獄に叩きつけて楽しいん？』

『端から見て面白そうだと思った』

『なんなん？ 兄上あたしのこと実は嫌いなん？』

『嫌いだったらこうしてお前とV t u b e rなんかやってねえよ』

『うへへへへwww』

：流れるような某芸人で草

：仲良しかよ

：そら兄妹でライバーになるぐらいだから仲は良いでしょ

：うちの妹に同じことしたら無言でピンタが飛ぶ

：女だけどうちの兄貴こんな話しかけてこない……

：それが普通よ

言いながら配信画面にましまろのページを表示できるよう準備する。操作ミスに気を付けながら、なるべく会話が途切れないように注意しながら。

『はい、優斗がせっせこ準備してくれたので早速返していくよー!』

『たまには変わってくれていいんだぞ妹よ』

『やだ。優斗のPCだから壊したりしちゃったら後が怖いし』

『漫画の機械音痴じゃないんだからそうそう壊れるかよ……まあいいや、というわけでさっそく一つ目のましまろ、はいこちら』

【双子って趣味嗜好が被るとよく聞きますがお二人はどうですか？】

『えー、どうだろ？ あたしたちそんな被ってることあるかな』

『意識したことねえなあ……好きな食べ物なんだっけ？ 俺麻婆茄子』

『同じく。飲み物は？ あたしコーヒー』

『俺もコーヒー。ちなみにブラック派』

『あたしも』

『好きな動物は？』

『犬』

『好きな花は？』

『マーガレット』

『……好きな映画のジャンルは？』

『のんびりしたラブコメ』

『………把握してる相手の癖は？』

『嘘つくとき目が左に泳ぐ』

『『気持ち悪い!?!』』

:フアーw w w w w w w w

:いやそんなことある?

:被りすぎてて草

:さすがに台本とか打ち合わせとかでしよ(震え声)

:いくら双子でもそれはウソでしょ

:パーフェクトシンクロ

:ロツ○マンエ○ゼかな?

:ごめんちよつと引いた

いや俺らもビビった。普段全然意識してないだけでそんなに趣味嗜好が被っていると
は思わなかった。なるほどこれがシンクロ芸ですか。

『ええ、なんかここまで来るとちよつと怖いわ……優斗明日から好きな食べ物ハギス
とかにしてよ』

『ふざけんな誰が好き好んで血の腸詰めなんぞ好物に指定するか！ 里奈こそセンブリ茶とかでいいだろ！』

『なんでよりによつてクツソ渋苦い苦行茶なんだよ！ あんま変なこと言つたらしまいにはムカゲ人間見さすぞ!!』

『とつくに見たよ』

『ウソでしょ!?!』

『ウソに決まつてるだろ』

『ンツギイイイイイイ!!』

…もはや芸術のような煽り

…乙女が出しちやいけない声出してる……

…どこから出してるんだよwww

…クツソ汚い声で草

…お勞しや妹上……

『あーもうムカつくから次いこう次!』

『ごめんて。はいというわけで次のましまろ出します、はい』

【配信見た感じしよっちゆう喧嘩してるっぽいですけど、普段喧嘩とかしますか?】

『いや、普段はそんなでもないかな』

『むしろ静かなもんだ。子供の頃はまあちよいちよいあったけど、流石に良い年だしな』
『というか子供の頃って何で喧嘩したんだっけ? すっごい下らない理由だった気がするけど』

『里奈が何でもかんでも俺とお揃いの服にしてどんどんボーイッシュになっていったから、可愛い服着せたかった母さんが落ち込んだことを注意して喧嘩になったな』

『あー……………そんなことあったね。全部優斗と一緒にやないと嫌だった時期だ』

『今は年相応の服装してるからお兄ちゃん安心ですよ』

『まあこの年になって兄妹でパールックは流石にね』

：子供の頃の兄妹見てみたい

：絶対見分けつかなさそう

：親でもどっちがどっちか分からない時ありそう

：双子の双子コーデはもはや分身なんよ

『あー確かに。最近アルバム見返したら、服も髪型もお揃いでマジでどっちが自分だったか分かんなかった写真あったなあ』

『あれホントにどっちがどっちだったっけ……自分でも分かんないんだよね』

『でも何故か母さんも親父も区別付いてたんだよね……何回かイタズラでからかおうとしたけど全部一発で見抜かれたし』

『「そりゃあ親ですもの、分かるわよ」って言われたけど、今考えても本気で謎だよね。親ってすごい』

：親ってすごい（小並感）

：偉大だよな

：何だかんだ俺も親には感謝してる

：机の上にエロ本並べるのだけはやめろ嫌がらせか

：親になるとエスパーになる説

『そーいや小学校の頃の同級生が、中学になって里奈の制服見て「お前女子だったの!?」って叫んでたことあったよな』

『あーあったあった！ 逆に「今まで男だと思ってたのかよ!!」ってキレちゃったけど今思うとちよっと理不尽だったよね』

『俺も口に出さなかつたけど、無茶言うなどは思ったよ。ずっと俺と一緒にいたから必然的に男子と遊んでばっかりだったし』

そもそも子供の時の遙香が女子と遊んでるところ数えるぐらいしか見たことないわ。高校だとちゃんと同性の友達と遊びに行ってたけど。

『いやでもさあ、さすがに声とかで気付かないかな?』

『中三まで声変わりもせず身長もほぼ一緒だったからしゃーない、ほら謝って』
『同級生君あの時はマジでスンマセンしたあ!!』

：そら(顔も髪も服も同じじゃ) そう(思っても仕方ない) よ

：同級生君かわいそ

：いや双子とはいえ男女で顔そっくりってそうそうなくね?

：子供の頃ならまあ可能性はある

：今は見分け付くんか?

『まあ今は身長も違うし、顔付きも違ってきたから一目で分かるぞ』

『体つきも全然違うしね。あたしスタイル良いし』

『ちなみに里奈の中の人は身長171cmです』

『優斗の中の人は182cmです』

：でっけえ！

：180とか男でもでかい方だろ

：いや里奈も結構背高い

：モデルかな？

高校入ってから一気に身長伸びたからなあ。中三の時は160cm後半だったのに、高校入学から一年で15cm伸びたときはビビった。

まあ母さんの親族が外国人つてのもあるけど、親戚皆でかかった。女性でも170後半とかザラだったし、男で180越えてないと人権ないような錯覚起きるよ。

『ちよつと話逸れてきたから次いつてみよ』

『あいよー、はい次はこちら』

【付き合った人とか……いらつしやらないんですか?】

『戦争がお望みか?』

：即答は草

：腹抱えて笑った

：その喧嘩俺も買った

：拙者明らかに恋人いない歴Ⅱ年齢の相手に確信をもって聞いてくる奴大嫌い侍、義
によつて助太刀致す

：拙者も同心致す

：処す? 処す?

：野郎ぶつところがしてやる!

『このましまろ送った奴には毎食何かしらの食べ物か歯に挟まって中々取れなくなる呪
いをかけるから覚悟しろ』

『あたしもコイツが海外のアングラでMAD素材になる呪いかけとく』

…地味に嫌な奴

…自分がMAD素材になるとか嫌すぎる

…なんて恐ろしい呪いなんだ……

『はいというわけで次』

『あいよハイどん』

【三井……お前がこんなことしてたなんて知らなかったよ……】

『三井が誰だか知りませんが人違いですね』

『こういう中の人のリアル知人が送ったみたいなましまろやめなさいよ生々しいから』

『全国の三井さん兄妹にあらぬ疑いがかけられるでしょうね』

『三井さん本当にごめんなさい、はい次』

【この間貸した三十円返して】

『借りた覚えが全くねーでござーますよ』

『てか三十円で』

『完全に自販機で細かいの足りないから借りた奴じゃん、なんならその日のうちに崩して返せる奴じゃん』

『延滞するような金額じゃねえよなこれ』

『くそまろ多いなあ……』

…くそまろ捌き配信になってきた

…毎回思うけどこういうくそまろってセンスある奴とない奴別れるよな

…センスある奴なに食ったらこんなの思い付くんやつくそまろばつかやからな

…段々塩対応になってくる兄妹草

…心なしか顔が虚無に……

『次いこうか』

『次はまともな奴だな、はいこちら』

【魔道学院に通っているとのことですが、もしかして魔法が使えるんですか？】

『もちろん使えるよー、ほらあたしらの髪見て、メツシユ入ってるっしょ？』

『皆に分かりやすいように、俺達が得意な属性魔法をメツシユに入れてるぞ。里奈は想像付きやすいよな』

：確かに気になってた

：里奈ちゃんは火と水か

：優斗くんは風と雷？

：土かもしれん

『そうそう、あたしは火と水ね！ 優斗が風と雷なんだよー』

『まあ魔法使えるって言ってもド派手な攻撃魔法とかは禁止されてるんだよな。せいぜい生活に便利なぐらい』

『今の時代に攻撃魔法使ったら普通に犯罪だしね』

：それはそうやな

：しやーなし

：世知辛いな

：でも魔法っただけでロマンあるよな

：どういう風に使ってんの？

『そんなに大したことはないぞ。風操って洗濯物乾かしたり部屋の換気したり』

『あたしはキャンプとかバーベキューに便利なぐらいかなー、火起こしの必要ないし、水もすぐ用意できるし』

『雷魔法なんて電気要らねーじゃん！　ってなると思うだろ？　変圧器通してないから

電圧高すぎて家電が全部駄目になります』

『子供のときケータイ充電しようとして爆発して大騒ぎになったよ』

：ヒエツ

：ケータイ爆発はヤバいな

：意外と魔法もそこまで便利でもないんやな

：高度に発達した科学は魔法と区別が云々

：科学は良いぞおじさん「科学は良いぞ」

言うまでもないがこの話は勿論作り話。遥香とあらかじめ魔法に関する質問などはこう答える、というチャートを組んであるのだ。

なのでリアリティのある、あたかも本当に体験したかのような話にはいくらでも出来る。ボロが出ないように気を付けないといけないが。

それからもういくつかのましまろを消化し、もう一度雑談に戻ってしばらくしたところで配信を終える。

「ふう……………」

「はへえ……………」

初回に比べれば少し慣れてきたが、やはりまだまだ緊張してしまふ。会話も途切れ途切れになっていった部分が何度かあったし、用意した答えも度忘れする始末。

「難しい……………配信って難しいよ……………」

「何だかんだまだ二回しか配信してないからな……ド素人なのは変わりねえ」

「なんか配信のコツとか誰かに聞けたらなー」

「誰かって誰だよ……」

「……………三期生のみんな？」

「あの人もそう大して変わらねえだろ、みんな素人だって言ってたし」

なんか鮎川聖こと美咲さんだけです。5回も配信してたけど。あの人ジムインストラクターだけあって体力有り余ってるのかな。

内容はまあうん……ひたすらリスナーを奴隷に仕立て上げてたよ。キャラ変わりすぎて怖いよ。普段めっちゃ気さくなのに。

「……………あ、そーいや明日」

「うん……丹生さんのところ行く日だね」

緊張すると大事なことが頭から抜ける現象なんなんだろうな。

この前約束していたギルバルト五世こと丹生俊輔さんが切り盛りする喫茶店に行く日。小鳥遊セレナこと棗凜花さん、鮎川聖こと金生美咲さん、そして我らが玉緒さんも

集まる、実質三期生オフコラボ。

なんかSNSでも三人ともそのこと呟いてるし。

小鳥遊セレナ

『明日三期生で集まって遊びに行くぞー、アンナコトコンナコトは期待すんなー？ 御簾納の二人とも初めて会うから楽しみだぞ！』

鮎川聖

『三期生のみんなと遊びに行つてきます。優斗くん、里奈さんと初めてお会いしますの
で、報告を震えながら待つていて下さいね、豚共』

ギルバルト五世

『余の城に三期生が遊びに来てくれるぞおー！ 御簾納兄妹とも初顔合わせだから緊張
してしまふなあ！ ワクワクして夜しか眠れん！』

思い思いに呟いてるけど、みんな俺たちのことを一番楽しみにしてくれているらしい。やめて変な期待しないで面白いことなんにも出来ないから。

「……………俺達も眩いところ」

「なんて?」

「コミュ障なのは伝えてるんだ、存分にネタにしよう」

「ネタに出来ないぐらい重症ですけどね……」

言うな妹よ、悲しくなるから。そんなことを心のなかで眩きながら、SNSに文章を入力していった。

御簾納優斗

『明日三期生のみんなに会いに行つてきます。コミュ障にはあまりにもキツイハードルです……………』

御簾納里奈

『他人と顔合わせるの恐怖でしかない。緊張して吐いちゃったらごめんなさい…………』

俺達のお知らせを見たフォロワー達からは『うーんこのコミュ障』『御簾納さあ…………』『しゃーない、気楽に行け』『骨は拾ってやるよ』などなど生暖かい応援メッセージを頂いたのだった。

#09 喫茶店行くときでもない食べないよね、ピザトースト（前）

「ええーと……この先を左に曲がって……？」

「あ、遙斗この道じゃない？」

「これか？ 大通りから外れるけど……」

「まあ行ってみれば分かるよ。隠れ家的って言ってたし」

日曜日。先日のwishcord打ち上げ会で決まった、『ギルバルト五世こと丹生さんが営む喫茶店へ、マネージャーの玉緒さんを含めた三期生が集まってワイワイしよう会』の当日である。

セレナこと棗さんはレポートの為に図書館へ寄ってから、聖こと金生さんは家の用事、玉緒さんは仕事の打ち合わせがあり、各自現地集合という形になった。

丹生さんのお店は原宿の少し分かりづらい場所にあるとのこと、事前に住所を教えてください、スマホのナビ機能で街を歩いていく。

あとから聞いた話だが、本来日曜日は定休日らしい。それを丹生さんの好意でわざわざ

ざ貸し切りで開けてくれるというのだ。あの人心が広すぎる。お土産に菓子折り持ってきて正解かもしれない。

余談だが飲食店なのに日曜日が定休日なのは珍しいですね、と丹生さんに言ったら「会社員時代から憧れだったんです……休日に休めることが」と生気のない声で呟っていた。しばらく無言になって気まずかったです。

「どんなお店だろうねー」

「まあ丹生さんから聞いた限りだと小ぢんまりした純喫茶じゃないか？ 奥さんと二人で切り盛りしてるみたいだし」

「なんか良いよね、奥さんと二人でって」

「夫婦で喫茶店、良いよな。柄も言われないエモを感じる」

「……………ダジャレ？」

「いやたまたま……つと、ここを右か」

そんなしよーもない会話を交わしながら、スマホのナビに従って進んでいく。いやはやしかし手元で道案内をしてくれるとは、便利な世の中だ。特に人に道を聞かなくても目的地に辿り着けるとというのがコミュニケーション的にポイント激高。

「あ、これじゃね？」

とかなんとかやってるうちに目的の店にたどり着いた訳なのだが。

「……………普通の家だよな？」

「うん……………？」

そこには店舗といえる建物はなく、周りと比べてもデザインが新しく大きめなぐらいで、ごくごく普通の民家が建っていた。え、本当にここ？

「住所は間違っていないよね？」

「ああ、何度も確認した」

表札にも『丹生』と書かれているから間違っではないはずなのだが、喫茶店という雰囲気ではない。どういふことだろう。

「……………えーと」

「ちよつとウイシユコでメッセ飛ばすか」

スマホを操作し、アプリとして落としておいたwishcordで丹生さんに確認を取る。

【送って貰った住所に来たんですけど、民家しか見当たらないんです……】

少し待つと、返信が来た。

【そこはおそらく正面玄関ですね。ぐるっと裏に回ってみてください】

「裏？」

書かれていた通りに丹生さん家の塀伝いにぐるっと回り込む。にしてもこの家大きいから地味に距離あるな。

と、裏手に回った俺達の目に飛び込んできたのは……。

「……あ、これだ！」

「おお……ちゃんとしたお店だ」

そこには民家と離れて建てられた、シックな雰囲気の立派な建物があった。確かに民家と比べれば小さいし、隠れ家的といえばそうなのか？

「雰囲気良いね」

「だな………入るか」

「あ、ちよつと待って心の準備が」

「今さら何言つてんだ、行くぞ愚妹」

「ああー待って待って引つ張らないで」

遥香のペースで付き合つてたら日が暮れそうなので半ば強引に引つ張り、落ち着いた色合いの扉を引く。

チリンチリン、とドアに取り付けられた鈴が鳴り、中にいた者達へ来客を知らせた。

「こんにちはー……」

「いらっしやいませ」

俺達を出迎えてくれたのは、すらりとした体躯の男性だった。

少し白髪が交じり始めた長めの茶髪を後ろで束ね、細目の銀縁メガネを掛け、顎髭をたくわえた男性は、柔和な笑みを浮かべてカウンターの端でカップを拭いていた。

「柳瀬遥斗君と遥香さん……だね？」

「は、はい。初めまして」

「こうして顔を会わせるのは初めてだからね。改めまして、丹生俊輔と申します」

そう言って丹生さんは丁寧にお辞儀をしてくれた。慌てて俺と遥香も頭を下げる。

薄々そうなんじゃないかなーとは思ってたけど、思ってた以上にイケおじだったよ丹生さん。やだカッコいい。

「玉緒さん以外はもう奥のテーブルにいるよ。僕はコーヒーを淹れてくるから、挨拶しておいで」

「はい、ありがとうございます」

「軽食も気軽に注文してね」

そう言うのと丹生さんはコーヒー豆を選び始めた。ブレンドコーヒーを作るのかな。

「奥のテーブルか……行こう、遥香」

「うん」

この位置からだとは丁度パーテイションがあつて見えないが、その向こうに棗さんと金生さんが居るらしい。言われてみれば少し小さいながらも女性の声が聞こえてくる。

自分でも自覚するほど、いやにゆつくりとした足取りで奥へと歩いていく。ヤバい、また緊張してきた。そろそろ慣れろ、俺。

「……………っ」

……後ろで俺の服の裾を握りしめっぱなしの遥香よりはマシか。やめろ遥香シワになる。

「……………こ、こんちはー」

覚悟を決めてパーティションから顔を出す。

「それでえ〜…………ふえ？」

「あははっ…………ん？」

そこに座っていたのは、当たり前だが二人の女性だった。

一人は全体的にゆったりとした……………なんだろう、森ガールというのだろうか？ ああ
いったふわりとした服装で、長い栗色の髪をゆるく三つ編みにした女性。

もう一人はなんとジャージのフアスナーを全開にさせ、肌着であろうタンクトップを
惜しげもなく晒し、下は短パンにスニーカーといういかにもスポーティーな女性。

「は、初めまして……………柳瀬遥斗です」

「柳瀬、遥香です……………」

「おお〜！ 君たちが噂の遥斗くん遥香ちゃんなんだあ〜！ 改めましてえ、棗凛花で

す〜」

「玉緒さんの言つてた通りめっちゃくちや顔がいいなあ！ あ、改めて金生美咲だよ！」

なるほど、声と見た目が見事にマッチしてこちらも分かりやすい。ゆるふわさんは見た目もゆるふわさんだったし、インストラクターさんも結構ステレオタイプな体育会系女子だった。

「こつち座つて座つてえ〜。わあ〜、二人ともスタイル抜群〜」

「遥斗くんマジででっかいなー、180台だっけ？」

「あ、はい。妹は170台で」

「愛想のないデカ女つすスンマセン……」

「そんなことないって！ うっわ足なっが！ 腰ほっそ！ え、内臓足りてるこれ？」

「二人ともまつ毛バシバシだねえ〜、美人さんだあ〜」

「い、や、あの、えと……」

「そ、そんなことないっ、す……ハイ、マジで」

と、座るやいなや怒涛の質問攻め。褒め言葉のサービスエース、姦しさマシマシ。

い、いかん、これが陽キャ特有のバグった距離感というやつなのか？ オフでは初だ
というのに初っ端からめっちゃグイグイ来られるんですが!? 出会った瞬間いき
なりトツプギアですか!?! 相手にペース握られっぱなしで上手く言葉が返せん!

というか初対面の人間の容姿を出会って早々ガンガン褒めちぎるとかなんなの!?!
陽キャ特有の陽キャにしかな許されない陽キャムーヴなんなの!?! 陰キャとかコ
ミュ障にそれ食らわせたら一撃で蒸発しますことよ!?!

「んー、でも遥斗くんちよーつと筋肉量足りないかなー? 普段全然運動してないで
しよ」

「わ、分かりますか?」

「二目で分かるよ! どころもかしこも細くてビックリした! 遥斗くん位ならマツチョ
とは言わないけどさ、身体引き締めたらマジでスタイル良くなるって! 今度うちのジ
ム紹介するからおいでよ、指導したげるからさ! ほら例えばこの辺とかこっちの筋肉
をね?」

「うえツ、あ、えとあの、その……か、考えておきます……」

あの、金生さん? そちらに下心というかさんなつもりは微塵もないんでしようにし、

多分善意で言ってくれてるのは分かりますけど、そんなナチュラルに腕とか腹とかガツツリ触らないで頂けると僕の精神衛生上大変助かるのですが？

なんなの？ 女子って皆こうなの？ なんて異性の身体をなんの躊躇もなく撫で練り回せるの？ それともこの人が特別気にしてないだけ？ もう僕女の子の心理とか分かんない。

「わく、遥香ちゃんお肌すべすべだあ〜！ え、化粧品なに使ってるのお〜？」

「え、つと、特に意識してない、ツス……乳液とかで……まあほどほどに……？」

「ええ〜っ!? それでこんなにもつちもちになるのお〜？ 私敏感肌だから羨ましいよお〜」

「あ、アハハ……ありあつス……へへ」

ヤバい、俺もだけどそれ以上に遥香がヤバい。コミュ障炸裂してる。陽キャとかウエイ系のバイト敬語みたいになってる。今まで聞いたことねえよ妹のあんな言葉遣い。

てか、俺もコミュ障じゃなかった時、多分このぐらいの距離感で人と接してたんだよな。しかも当時クラスにいた今の俺ぐらいの陰キャボーイに、こーい感じで話し掛け

てた記憶あるわ。あの時はそんなに怖がなくなっても、みたいに思ってたけど今なら気持ち解る。あの時こんな気持ちだったんだね。ごめんな山下君。もし同窓会とかで会ったら謝る。

「ほらほらお二人とも。遥斗君達が困ってますよ」

対応に困っていると、横からトレーにコーヒーを五つ乗せた丹生さんが、苦笑しながら二人を宥めに来てくれた。

「あ、ごめん……もやしっ子見ると鍛えたくなつてつい」

「私もごめんね、ふるふるお肌羨ましくてえ〜」

「いや、大丈夫……き、気にしてないですから……」

「怖え……陽キャ怖えよ……あたし死ぬかもしれん……」

あかん、会って間もないのにドツと疲れた。これが陽キャか……。

おのれ、ただでは転ばんぞ。ボヤイターでネタにしてやる。

御簾納優斗

『三期生集合したんですけどセレナと聖の距離が近いたすけて』

うわ、速攻でc o m p l a i n (コンプレイン)。ぼやき。リツイートの意味合いリコ
ンプが来た。なにになに？

『は？』

『ふざけんな』

『けしからんもつとやれ』

『羨ましすぎるんだが？』

『そこ代われ』

『いい匂いしそう』

『これは御簾納君炎上ですねえ……』

『優斗くんさあ……』

あるえー、おかしいな味方が誰一人としていないぞ？ お前ら今の俺と代わって同
じこと言えるのか？ この状況コミュ障でなかったとしても男だったらかなりキツイ

んだが？

うわ、『#御簾納優斗#爆発しろ』って。なんだよこのハツシユタグ。俺だって好きでこんな状況になった訳じゃないんですけど？！

「まあみんな、コーヒーをどうぞ」

「わく、丹生さんありがとう」

「美味しそうだなー」

「ありがとうございます」

「いただきますー！」

丹生さんが目の前にコーヒーを置いてくれる。湯気と共に立ち上る豆の芳醇な匂いが鼻をくすぐった。

ああ、落ち着く。この匂いで幾分か気持ちフラットになるのがいい。しかも普段俺が淹れる物とは全く違い、豊かで奥深い薫り。これがプロの淹れるコーヒーか。

まずは一口、口に含む。最初に来るのは香ばしさ。次いで苦味と、少しの酸味。それらが舌の上で踊り、すぐに喉の奥へ消えていく。後に残るのは、鼻から抜けていく残り香。

ああ。

「美味しい……」

思わず遙香とシンクロしてしまうほど。丹生さんが淹れたコーヒーは、今まで飲んだコーヒーで一、二を争うほど美味かった。

「あははっ、ホントにシンクロした！」

「やっぱり双子さんだねえ」

「ああいや、アハハ……」

「でも丹生さん、本当に美味しいです！」

「そう言つて貰えると嬉しいね。僕も店を開いた甲斐があるというものだ」

丹生さんは目を細め、人の良さそうな笑みを浮かべた。

「自分、普段飲まないけど、コーヒーってこんなに美味しいんだ……」

「ふわあ……！！」

棗さんも金生さんも各々感想が口から漏れ出る。

「玉緒さんももうすぐ来るみたいだから、のんびりくつろいで。注文があれば聞くよ」

「あ、自分ドリアで！」

「私はワツフルを〜」

「あたしは……パンケーキで」

「俺はそうだな……ピザトーストください」

「はい、かしこまりました」

丹生さんは伝票に走り書きすると、ニコニコとキッチンへ戻っていった。この仕事が好きなんだと感じる。

……問題は軽食が来るまでの間、どうやって場を繋ぐかなんですが。

「遥香ちゃんの目って青いけどカラコン？」

「あ、これは天然なんです……ママが外国人なので」

「え〜っ、じゃあハーフなんだ〜！」

「まあママもヨーロッパのあちこちの混血なんで、ハーフとも言いにくいですけど……」
「じゃあ、外国語も話せる？」

「日常会話なら、主要言語はある程度」

「スゲー、マルチリンガルってやつか」

「親戚グローバルだったんで……話せないと困るんス……」

いつの間にか遥香が馴染み始め、女三人寄れば姦しい状態になりつつあった。

あれ、もしかして今遥香より俺の方が馴染めてない？

（い、いや落ち着け？ 女子の会話にむやみに男が突っ込んでいっても空気読めない奴って思われるし……話題振られたら答えるぐらいが丁度いいし……）

そう自分に言い聞かせるも、内心焦りまくり。背中にも嫌な汗が出てきてなんとも落ち着かない。

丹生さんが帰ってくるのが待ち遠しくなるとは思わなかった。お願い早く帰ってきて丹生さん、男同士仲良くしましょ。このままだと俺、妹にも出し抜かれて真のぼっちになっちゃうよ。

心の中で必死に願うも、叶うはずなく。仕方なくボヤイターでネタにする。

御簾納優斗

『いつの間にか妹がセレナと聖に馴染み始めてお兄ちゃん微妙に疎外感』

『フアーｗｗｗｗｗｗｗｗ』

『草』

『お兄ちゃんエ……』

『妹よりもコミュ力低いとか恥ずかしくないの？』

『ねえどんな気持ち？ 同期どころか妹にもハブにされて今どんな気持ち？』

ネットの向こうにも味方はいなかった。泣きそう。

御簾納優斗

『今ギルバルトに優しくされたら惚れるかもしれない』

『ハハ。』

『草』

『お前ホモかよお!?』

『なんだそれは、たまげたなあ……』

『どういふことなの……』

さらにリコンプが加速した。泣きそう。

#09～喫茶店行くときでもないと思えないよね、ピザトースト（後）～

「ドリアうつま！ あれドリアってこんな美味かったっけ!？」

「んふふ、ワツフルサクふわ〜！ ベリーソースもおいしい〜！」

「パンケーキふわっふわだあ……ほっぺ落ちてないよね？」

「んつま、ピザトーストんつま」

しばらくして各々の料理が運ばれてきて、それぞれ一口味わい、思い思いに感想を口に出す。それを隣のテーブルに座り、頬杖についてニコニコと笑いながら眺めている丹生さん。

そして、

（んほっほおおおおお〜〜〜！ アイイ！ すごく良い！ 遙かによいですツ!!）
なんだこのてえてえ空間はツ!? ダンディーな喫茶店のマスターが作った料理に少年少女が舌鼓を打ちツ！ それを見たマスターが嬉しそうに微笑んでいるツ!! あ

りそうでなかったとある休日の日常を切り取ったこの瞬間は、まさしく私の生み出した光景ツ!! これが私の生み出した三期生ツ!! おほほほっ! たまらんツ!!)

少し時間が経ってからやってきた玉緒さん。今は丹生さんの向かいに座ってコーヒーを味わっている。きっと今もお仕事のこと考えてるんだらうなあ。

俺はといえば、女子三人のテーブルになぜか交ざる異物のような気持ちで、ピザトーストを頬張っている。正直言って女子の会話に交ざれる気がしないべき。

なかがアレかって、俺と同じくコミュ障であるはずの遥香が、いつの間にやら棗さん金生さんと完全に打ち解けていることである。

「うわ、美咲さん筋肉すごいっすね」

「腹筋もうっすら割れてるんだよお。前に見せてもらったけどお、スタイルもよかったです、美人さんだしモデルみたいだったよお〜!」

「自慢の腹筋だからね! まあおかげであんまり出会いとかないんだけど……」

「なんでだろうね〜? 男の人って見る目ないよねえ〜!」

「ホントっすよね……あたしは下手な男子よりタツパあるだけで……」

「一番スタイル良い子がなに言ってるんだ」

「チビの私に対する嫌味かな〜?」

「ヒエツ」

さつきまで俺以上に緊張していたはずなのに、今はまさしく「女三人寄れば姦しい」という言葉通り、キヤイキヤイと楽しそうにおしやべりに夢中。口調がまだおかしいけどしつかり溶け込んでいる始末。

「やっぱりアレなの? 女子はスイーツで繋がるの? 甘いもので通じあうの? 心と心がコネクトするの? 一人がつつりドリア食ってるけど。」

「……………」

交される筈もなく、ボヤイターで実況する。

御簾納優斗

『向かいに妹、隣に聖、斜め向かいにセレナ。妹は完全に馴染んでおしやべり中。お前から俺の立場だったとして会話に交される自信ある?』

『いやーキツいつす』

『無理無理かたつむり』

『場違い感すごい』

『優斗すげえよ。俺だったら速攻で隣のテーブルに移ってる』

『お前ならやれる、突っ込め。骨は拾ってやる』

『ド畜生がいて草』

先程よりは優しいというか同情が文章に見える。まあ現状を打開出来るようなりコ
ンプは来てないんですけどね！ お前ら女子耐性なさすぎだろ！ 俺が言えた口じゃ
ないけど！

ちら、と丹生さんに助けを求めるつもりで視線を合わせる。うわすげえいい笑顔でサ
ムズアツプされた。助ける気は毛頭ないと。この人意外と面白がってド畜生になるタ
イプでござるな？ おい玉緒さんなに笑ってんだ面白がりやがって。

「アハハハツ……………ん、遥斗くん？」

「えっ……………あ、はい、なんででしょう金生さん」

なにを思ったのか突然金生さんに話し掛けられた。ちよつと声の上擦ってしまつて恥ずかしい。

「えつと、なんかあんまり楽しくなさそうだなつて……スマホいじつてるぐらいで」

「あーなんとというかその……単純に会話に交ざれる気がしないというか……」

「あ、ごめん！ 夢中になつて仲間はすれみたいにしてたな！」

「いやいやそんなことないですよ！？ そもそも男子が女子の会話に交ざること自体難易度高いんですし！」

「あく、確かにそうだよねえ。異性との会話つて難しいよねえ」

棗さんも会話に入つてくる。いや、普通に輪に入つてる貴女はすごいと思いますけど？ 俺同性でも盛り上がつてる輪に入つていこうと思えない。

「いや、それでもだよ！ 自分年上だしその辺気を配つた方がいいよなつて思つてたのじゃ……」

「遥香と打ち解けてくれただけで十分ですよ。こいつ俺以上のコミュ障なんで」

「そのコミュ障の妹にすらハブられてどんな気持ち？」

「二度と口きかん」

「それだけはやめて!？」

「遥香ちゃんって無意識に余計なこと言うタイプっぽいねえ」

さつきまで俺の後ろに隠れてた奴が何を偉そうな口をきいておるか。今日の晩飯こいつの嫌いな大根でフルコース作ってやる。

「まあ、俺達揃いも揃ってこんな感じなんで、配信も色々悩んでるんですよね」

「そうなんだあ〜……」

「その点美咲さん、めっちゃ配信頻度高いっすよね。話題も尽きなくて途切れないし」

「ああ、あれ？ 別にそんな難しいことじゃないよ？」

金生さんはあつけらかんとそう言った。いやそれが難しく感じるんですけども……。

「あれね、よく配信のアーカイブ見てみなよ。話題の八割は「コメントから拾って繋げる」だけなんだ」

「コメントから拾って……」

「繋げる……」

思わず遙香と顔を見合わせる。コメントで話題を作る、なるほど。

「別に自分達で話題を全部用意する必要はないんだ。雑談配信なら、ほぼ間違いない話題を広げられるコメントが出てくる。こっちはそれを拾って会話を繋げる。そしたらまたコメントが盛り上がって、他の話題が出てくる。難しく考えなくて良いんだ」

「な、なるほど……」

「遙斗くん達もさ、今までの配信でも無意識にそういうことをやってるはずなんだ」

金生さんの言う通り。思い返してみると、配信中に話題に困って、コメントから拾って話し始めたことがある。無意識のうちだったから自覚がなかったのか？

「だから、配信の時でも自分の話題は多くて3つぐらいかな。あとはコメ拾って喋る。そんだけだよ」

「……でも金生さん、それって失敗するリスクとかありませんか？ コメント拾って

滑ったり……」

「そんなこと怖がつてたら配信なんて出来ないでしょーが。恐れるな、失敗したらしたで美味しいんだ。そもそも自分達は配信者としてはずぶの素人なんだから、失敗して当たり前なんだよ」

「う……………」

金生さんの言葉は尤もだった。最初から失敗を怖がつていたらなにも始まらない。

俺は、俺達は、そういうところを克服したくて配信者になったんじゃないのか。

俺達の事情を話してはいないはずなのに、金生さんの言葉は、俺の心の奥底に突き刺さったような思いだった。

「あと、名前！」

「へっ？」

「美咲でいいよ！ 金生さんなんて距離あるし、呼ばれ慣れてないから！」

「え、いや、でも」

「あゝ、それなら私も凛花でいいよおゝ」

「ええっ!？」

棗さんにも名前前で呼べって言われたんだけど。なんだこれどういう状況だ？

「名字で呼ばれるとなんだか他人行儀な気がするんだあ。遥香ちゃんはもう名前呼びだしい、いいかなって〜」

「自分も凜花も遥斗くんのこと名前と呼んでるしな。君も遠慮なく呼んでいいぞー！」

ええ、と？ 本当によろしいので？

思わず丹生さんを見る。ん？ 何だろう、自分を指差して……あ、自分も名前と呼べと？ 皆気軽に名前呼び許可しすぎだろ。玉緒さんも名前だしなんだこの空間陽キャしかいねえ。

「え、えつとじゃあ……改めてよろしく。美咲さん、凜花さん」

「さん付けもいいのに……まあ追々慣れてくれればいいか」

「んふふ。遥斗くんよろしくねえ〜」

すごく気恥ずかしい。丹生さんが「僕は？ ねえ僕は？」と言いたげに自身を指差し

ているが、それは無視する。さつき助け船出してくれなかった仕返しだ。

あらら、しよげた顔しちやった。玉緒さんが口を覆って腹抱えてプルプルしてるけどまあ放つておいて害はないでしょ。

「まあ色々言つたけどさ。要は今のうちに色々試しなさいってことだよ。失敗を恐れてちや出来ることも出来なくなるよ」

『習うより慣れろ』ってことだねえ〜」

「ありがとう、美咲さん」

「青春だねえ。おじさんには眩しいよ」

「あ、丹生さんコーヒーおかわり」

「やつぱり僕は名前で読んでくれないんだね？」

しよぼしよぼと肩を落としながらキツチンへ向かう丹生さん。あの人意外と打たれ弱いな。あとでちゃんと名前で呼んであげよう。

（むほほほっ！ 丹生さん可愛いッ!! ダンディーなのにお茶目で可愛いおじさまとか私の大好物ですわッ！ アイイ！ 尊みで心臓きゅつてなるッ！ ここで死んでも

後悔はねえツ!!)

それで玉緒さんはやっぱり腹抱えて笑ってる。あの人意外とゲラだな。

『……………つていう感じでね？ いやーオフで会ってみて色々と同期の印象が変わった一日だったよ』

：良かった……同期にハブられるコミュ障は居なかったんだね

：やさしいせかい

：三期生あつたけえ

：迷える子羊を導くシスターの鑑

：下々にも寛大に接してくださるとはお優しい聖様

：ギルベルトどんどんすきになる

：セレナは流石によそ行きだったか

：TPO弁えないとPTAが五月蠅いので……

：弁えるべきは倫理観なんだよなあ……

：マナージャーがしょんぼり魔王様に延々とツボつてた話で白米三杯いける

その日の夜の雑談配信にて、オフ会であった出来事をリスナーに掻い摘まんで報告した。当然中の人の職業等、プライバシーに関わるものは伏せて。

結果としてかなり端折った話になってしまったのだが、それでも割かし内容としては濃かったようで、視聴者も楽しんでくれたようだ。

『名前で呼んでくれとも言われたしな』

『あの時の優斗ってホント両手に花だったよね』

『PTAに全力で喧嘩売ってる教師と腹黒ドSシスターは花つて言えるのか?』

『花でしょ。高嶺の』

『聖様はともかくセレナは高嶺か?』

『あー確かに。高嶺って言うかバカねって感じかなあ』

『バカが人のことをバカと言っちゃいけませんよ』

『誰がバカじゃない!?』

『お前じゃい』

『即答すんな!?!』

：隙あらば妹デイス

：いつもの

：草

：兄妹喧嘩たすかる

：まあセレナは高嶺の対義語なのは事実だし……

：セレナだって清楚だルルオ!?

：お前の持つてる国語辞典おかしくね?

：清楚の意味を調べ直してこい

まあ素の二人は下ネタオープンでも腹黒ドSでもないし、凜花さんに至っては普通に本来の意味で清楚っぽかったけどな。なんであんな個性で殴りかかるようなキャラクタ―にしたのか未だに理解できん。

……そんなことより、だ。

『なあ、皆に一つ聞いて欲しいことがあるんだけどさ』

俺は視聴者にそう呼び掛け、一つ深呼吸する。遥香も何かを察してくれたのか黙ってこちらを見た。

『あの聖のアドバイス、俺の中で刺さりまくってさ。確かに自分でも無意識のうちに、保身に走ってたというか、攻めの姿勢じゃなかった』

足りなかった。俺にはV t u b e rとしての、配信者としての。

何よりも企業から給与を貰って配信しじとをする、社会人であるという自覚が全く足りていなかった。

分かってた。分かったつもりでいた。だけどそれは所詮「分かったつもり」だっただけで、実際は何も分かっちゃいなかった。

『優斗……?』

『喝を入れられた気分だった。お前はそれでもプロなのかって。配信で食っていくつもりはあるのかって言われた気がして』

美咲さんには感謝しかない。彼女のおかげで、覚悟が出来たんだ。

『だから、さ』

俺は、もう。

『次の配信、楽しみにしてほしい。皆をあつと言わせて見せるから』

プロの配信者なんだ。

#10 追い詰められた遥斗はなんかもう色々とアレである（前）

「……で、遥斗。何をやらかすつもりなのさ」

オフコラボ報告配信を終了し、配信を終わらせた後。

遥香は俺にそう問うた。

まあ、当然か。俺が考えていることはどのつまり、俺自身の脳内で完結していることであって、妹である遥香には一切何も伝えていないのだ。

「遥斗の考えることだから、まあ意味がない訳は無いと思ってるけどさ。そういうのはちゃんとあたしにも情報を共有して然るべきじゃないの？」

「……悪いと思ってる。だけど、先に言っていたら、遥香は反対すると思ったから」

「……本当に何をするつもりなの？」

遥香の眉がさらに訝し気に吊り上がる。

双子とはいえ、相手の全ての考えを察せるわけではない。20年接してきた双子の片割れである俺が言うのだから間違いではないと思う。

だから、今俺が考えていることを遥香に伝えたとき、どういう反応を返されるのか想像がつかない。怒るだろうか、悲しむだろうか。受け入れてくれるか、拒絶されるか。

ベストなのは遥香もそれに付き合ってくれらることだが、最悪それは俺一人でこなすことも視野に入れている。正直、確率は半々といったところか。

「……遥香。お前、配信者として、何でもやっていくつていう覚悟はあるか」

「……何、いきなり。そりゃあ言い出しつぺだし、遥斗を巻き込んだ自覚もあるから、それなりの覚悟はしたつもりだけど」

「なら、今から俺が言うことに、頭ごなしに怒るなよ」

「次の配信、ホラゲ実況するぞ」

「断る」

…きちやあああ

…きたきた

…ホラゲ気絶配信ってマ?

…大丈夫? 心臓止まらない?

…苦手なものに敢えて突っ込んでいくとかドMなの?

…聖様に見下されて罵倒されて興奮する双子イラストはよ

…→こいつをつまみだせ!

数日後、俺と遥香は配信を開始した。

おどろおどろしいモノクロ調のゲームのタイトル画面を映しながら。

『はい皆様こんついでん………ライブラフ三期生の双子、妹の方御簾納里奈でーす

………』

『おなじくこんついん！ 兄の方御簾納優斗です！ 今夜も俺達の配信に来てくれてありがとうございませう感謝感激雨あられですペコリ〜！』

『なんでそんなテンション高つけえんだよ……うっぎ………』

：いつもとテンション真逆で草

：里奈ちゃんめちやくちや萎えてて草

：兄貴テンションどうした

：情報が多すぎる

：お口わるわる妹助かる

『はい、というわけですね！ えー今回ボヤイターの告知にも書きました通り、二人でホラゲを実況プレイ配信してみようというわけなんですけどもね！』

『マジで何なのそのテンション……イラッとするんだけど……』

『はいこの通り、うちの愚妹はもう既にテンションだだ下がりなんですけどもね！ い

つもどおり二人仲良く喧嘩しながらやっていきたいと思いまーす！』

『なんなら今からガチで殴り合おうか』

『ちなみになんで妹こんな静かにぶちギレてるかといいますとですね、コイツホラー全

般がどちやくそ苦手で、ゴー〇トバ〇ターズの映画見て号泣するほどなんでござえます
はい』

『悪いかよ』

『そしてなんで僕がこんなテンションおかしくなってるかと言うとですね、僕も同じぐ
らいホラー全般苦手なのでテンション上げないとやってらんねえからですはい』

『もうマジでコイツなんなん!? お前の自爆にあたしを巻き込むなよ! やるなら一人
でやれよ巻き込み事故起こすなよ!』

『最終的にオツケー出したじゃん』

『ええ出しましたよ許可しましたよ! 「断ったらしばらくお前の晩飯茹で玉子の白身
とささ身にするぞ」って脅されてなあ!?! 何が悲しゆうてボディビルダーみてえな食生
活送らにやならんのだおかしいだろ!!』

：草

：草

：ひつでえwwwwww

：ド畜生やん

：死なばもろともという強い意志を感じる

:二人でやれば怖くないの精神

:たぶん絶叫が二人分になるだけだと思うんですけど(名推理)

:実の妹になんという仕打ちだいいぞもつとやれ

:腹いてえwwwwwwww

:里奈ちゃんは何をしたってんだ……

:まあオツケー出したんならしょうがないよね

:でも断つて腹筋バキバキになったビルダー里奈ちゃんはちよつと見たいかも

:→ドゴオ

初っぱなの掛け合いでコメント欄が爆速で流れていく。ちなみにこの掛け合いは事前に遥香と「こういう掛け合いをしよう」と決めていたものだ。

遥香が実況を渋りに渋ったのは事実だが、流石に自分の妹を本気で脅すような真似はしていないです。全てはリスナーを増やすため、後々のスパチャのため、身体を張っていかなければこの先生きのこれないと説得したのだ。ホラゲ配信を最後まで生きのこれるかはまた別の話。

『お父ちゃん、お母ちゃん、最近兄の鬼畜っぷりが常軌を逸しているとです……』

『おうどうした、誉めてもこのゲームの続編しか出ねえぞ』

『誉めてもねーし要らねーよ!! つーか用意してんのかよ!!』

『うん、言い忘れてたけどこっちもやるから』

『ああああああ!! ふざけるなあ! ふざけるなあ!! 馬鹿野郎オオオオオオ!!』

『そうキレイなつて、フラグ回収してけば終わるから』

『こんな外道の兄がいる部屋に居られるかッ!! あたしは実家に帰らせて貰いますッ

!!』

『ここがお前の実家だ諦めろ』

『ンンンンンンンンンンンンンンンンンンンンンンン!!』

…愉悦の人やんけ

…下衆の極み兄貴

…凄まじいうめき声で草

…そこまで嫌かwwwwwwww

…おいたわしや里奈上

……とまあ冗談半分本気半分で遥香と軽快に掛け合っていく。最近はこの軽薄な調

子で練り広げられるトークが好きだと言ってくれるリスナーも多く、大変にありがたい。

『はい、というわけですね。今回実況していくのはこちらのホラーゲーム【Sweet home】でございますけどもね。なあに複雑な操作は一切なし、ただクリックするだけ！ ね？ 簡単でしょう？』

『そのクリック一つ一つがすさまじく重いんですけど』

『気のせいだよ。はいというわけでやっていくぜひゃっほう』

『いやひゃっほうじゃねーんだわ』

『いいから俺と一緒に犠牲になるのだあ』

『ちくしょうこれ終わったら甘いものヤケ食いしてやる』

隣でぶつぶつ文句を言う——これも台本通りだが恐らく本心だろう——遥香を尻目に、ゲーム画面をクリックする。

すると画面に英語の文章が、演出の一貫か妙にゆっくりと浮かび上がった。

『えーつと、なにになに？ In 1967, a family suicide to

ok place in this house. Since then, rum

ors have circulated that the ghosts of
the family members who lived in this
house appear. You go to the house to
find out the truth behind the rumors: : : :
』

!?

：フアツ!?

：今の英語優斗くん?

：なんて?

：滅茶苦茶流暢でビビった

：ネイティブの人呼んだ?

：つよつよ勢なんか

『ん? ああ、言ってなかったっけ。俺達英語は得意なんよ。んでこの文章だけど、[1967年にこの家で一家心中があつて、それ以来怪奇現象が起こるって噂があるから、確かめるために一人で来た] って書いてあるな』

『なんでこんな如何にもヤバイ所に一人で来るんですかねえ……』

『ホラゲだからだよ』

『分かっているよそんなことお……身も蓋もねえこと言うなよ……』

『里奈さんふにやふにやで草』

『苦手なんだからしょうがないでしょうよお……てか苦手なのはあんたもだろ……』

：ホラゲかと思つたら英会話レッスンだった

：はえーすつごい分かりやすい……

：英語ペラペラな人尊敬する

：まあ確かにこんなとこ複数人で行けよつて思うよな

：何人来たところで動かすのは自分だから実質一人ゾ

：身も蓋もねえこと言うなよお……

：ちよつと定着してて草

さてさて、このゲームはいわゆるflashゲーで、特定のオブジェクトを複数回クリックするとフラグが成立して、アイテムを拾ったり、イベントが起こったりしてゲームが進む。

今現在画面には、どうやら件のホラーハウスの玄関前に居るようだ。目の前には侵入

者を拒むように、モノクロ調で表現されたドアが鎮座しているのだが、

『ノックしてもしもオオ〜〜し』

俺はドアをひたすらクリックする。ドンドンドン！ という激しく玄関を叩く音が断続的に鳴り響いた。

『ウワーツ！ 躊躇いもなく連打してる!!』

『玄関で止まってられるか！ 開けろ！ デトロイト市警だ!!』

『一般ピーポーですけどもお!?』

：草

：草

：マジで兄貴のテンションどうした

：ジヨ〇フは草

：おい妹止めろ、目を背けるな

：おい全然怖くならねえぞwwww

バカやってるうちに玄関が開き、画面が暗転。次のシーンへ。家の中に入ってすぐだろうか、それなりに広い部屋のようにだ。

『おつ、開いてんじやーん』

『開けたんだよなあ……』

『えーつと、ダイニングルームか。いやー荒れてますねえ』

『そりや廢墟だからね』

『んーなにかないかなーつと……おつと、早速第一オブジェクト発見！』

『なにそのダ○ツの旅みたいナレーション』

『ウーウウツフヤイヤイウオーウイエーエエ』

『歌わなくていいから』

…急に歌うよ

…第一村人（故人）マダー？

…優斗くんテンションがおかしいけどマジでどうした

…自分も怖いのを勢いで誤魔化してるんでしょ

：あーなるほど

：で、いつ頃絶叫するんです？

：まーまーもうすぐですよ

：いかんニヤニヤしてしまう

クリツクに反応したのは額縁に入った絵のようだ。画面にオブジェクトの詳細な画像が表示される。

『えーこれは……家族の絵ですかね？お父さんお母さん、えー子供は二人、男の子と女の子かな？どつちかが描いたんですかね』

『ねえお母さんだけ妙に黒っぽい色使いなのはなんで……？』

『明らかにお母さんが原因って感じだな』

『あーやだよだ……これじつと見てるとこつちまで呪われそう』

『いやあ流石にそれは』

バリントツ!!

『『おわあああああつ!!』』

：草

：うるせえ!!

：俺もビビった

：鼓膜キンキンなんだが？

：こつちにダメージ来るのは聞いてないんですけど

：ユニゾン効きますねえ！

『あービツクリした!! 心臓止まるかと思った!!』

『なんの前触れもなくガラス割れるのやめろ!!』

いきなりバリントツ、はやめてくれよ。いや、そういうゲームなのは分かってるけどせめてもうちよつとこう、前兆とかそういう前振りみたいなのないんですかね？

なんの前情報もなくプレイしたけどこれそういうのばかりなのか？ 俺心臓持つかな……。

『……………里奈さん、ひとつ提案があるのですが』
『なんででしょうか優斗さん』

『ここでやめて雑談配信に変更というのは』

『おいい出しっぺ』

『いやだって怖いもん！ 覚悟はしてたけどやっぱ怖いもんは怖いもん!!』

『お前がやるつつつてあたしも巻き込んだんだろ!! ここでヘタれるとかお前赦されざるよ!』

『分かってるけどさあ!! 頭では分かってるんだけどさあ!!』

『あのことバラすぞ今ここで』

『どのことだよ!? 全く身に覚えはないけどなんか怖いからやめろ!!』

『このまま進めるか今あたしにこの場であることバラされるか二つに一つださあ選べ今選べすぐ選べほら選べ』

『全力でやらせて頂きまあす!?!』

…一瞬でへたれる兄とぶちギレ妹

…形勢逆転してて草なんだ

…お前らボケとツッコミ目まぐるしく入れ替わるな

…漫才コンビかな？

…優斗くんそれはないわ

『……………カスタードシユーで手を打たないか』

『実は兄貴は中学一年の秋にー！』

『やめろおおおおお!!』

…草

…もう顔面草まみれや

…往生際悪いなw

…中1のとき何があつたんだよ

…ガチの叫びやん

…逆に気になるわ

…やらなくていいから黒歴史聞かせてくれ

『ちくしょうやるよやりますよ！ その代わりお前も目エ逸らすなよ!! 絶対だからな
!』』

『分かったからはよ進めんかい！ しまいにや本当に喋り始めるよ!!』

『こんにやろうなんつー脅し文句だッ！ クツソ、こうなりやヤケクソだ！ 速攻でク
リアしてやる!!』

『おら早く進めるんだよお!!』

『分かってるから急かすな!』

【ヴァアアアアア!!】

『ぎゃああああああ!!』

…うるせえ!!

…草

…鼓膜ないなつた

…なんにも聞こえなくなつたんだが

…あれ今日って鼓膜破壊配信でしたっけ？

：クリアが先か俺らの鼓膜が潰れるのが先か

：狂気の沙汰ほど面白いッ……………！

：鼓膜倍プツシユだ……………！

：鼓膜倍プツシユってなんだよ

：私にも分からん

母さん、親父。わりと早くそつちに行くかもしれません。

#10 追い詰められた遥斗はなんかもう色々とアレで

ある（後）

『ああああ待つて待つて出てきた出てきたなんか風呂から出てきた!!』

『距離がだーいぶ近いでーすねええ?』

『やめろやめろこっちに来ないでやだやだやだ』

『すみませんがお探しの方と僕らは人違いではありませんかああ!?』

バアアンツ!!

『『手形ああああアツ!!』』

『え? 待、ちよつ、なんでラジオ鳴り出すんだよ』

『待つて待つて止まって止まって音はマズイ奴らに気づかれる』

『いや多分気づかれてるでしょこれもう!』

『ぎゃああ絵画こっち見んな!! なんて肖像画なのに目玉グリグリ動くんだよ!!』

『うわー綺麗な血涙だなあー絵画でも泣くことがあるんだあー』

『優斗現実逃避しないで!! おい戻ってこい!!』

ダアアアンツ!!

『『眉間撃たれたあああッ!!』』

『なんで人形なんか吊るしてあるんだ……?』

『しかもよくよく見たら首に紐くくりつけてあるし……悪趣味だなあ……』

『クリツクしたら揺れるな……誰だこんなことやったの』

『そりやあたしらの前に入った誰かじゃないの?』

『でも玄関鍵掛かってただろ』

『あ、確かに……え、窓は?』

『窓開いてたんなら玄関から入る意味無くね? 閉まってたんだろ』

『ええ? じゃあこの家に居る霊がやったん? 何のために?』

『こういう死に方しましたっていうアピールじゃないか?』

『アピールしてどうすr』

バゴオオオオンツ!!

『上から来たあああああッ?!?』

『もうやだあ……このゲーム怖いよお………』

『さ、叫びすぎて具合悪くなってきた……』

『もう意味分かんないよ……外国の幽霊アグレッシブ過ぎるよ……』

『風呂から出てくるわ絵なのにド頭ぶち抜かれるわ上からダイナミック首吊りするわ……なんなの? そんなに俺らに死に様を見せたかったの? 見せてどうしたかったの? 目立ちたがり過ぎんだろあの世でイエス様に愚痴つてろよ……』

『ねえもうクリアしよ? さっさとクリアして今日はもう寝よ?』

『分かってる……分かってるんだけど、クリックする指が、重い………』

『なんでホラーなんてジャンルがあるの……死滅してしまえばいいのに……』

『兄としては妹の提案に賛成である……』

…満身創痍やんけ

：そらあんだけ叫びや疲れもするでしょ
：でも二人のユニゾン絶叫ちよつと気持ちいい
：叫んだら妹と声域が同じになる兄すき
：優斗くん意外と声の幅広いっぽいよね
：鼓膜破れてもいいからもつと叫んで
：なんて耳に悪い配信だ……

一時間。本来想定されているこのゲームのプレイ時間を二倍以上かけ、なんとかかんとかゲームを進めてきた俺達。

もう、アレです。これクリアしたら二度とホラゲはしたくないです。たかがゲームでなんでこんなに疲れなきやならないんだ。

疲労困憊もいいところだ。これじゃあ俺……配信をやりたくなくなっちゃまうよ……！

だがその辛い時間もようやく終わる。

ステージの終わりでは毎回画面の右下に、

[Next stage……↓]

というテロップが出てくるのだが、今回出てきたのは、

【Last stage……↓】

というもの。

そう、いよいよこのゲームも終わりが見えてきたのだ。この次をクリアすれば、この心臓に悪いゲームを終わらせることが出来る。真つ暗闇に見えた一筋の光明。

だが同時に、最後ということは、今までで一番ヤバイステージでもあるに違いない。そう考えるとクリックを押す指が強張る。

『フウーーーーー………行くかぁ里奈』

『………っし、覚悟できた。行こう優斗』

もうここまで来たら最後までやり通そう。これが終わればオフトウンが待っている。恐怖体験における最後の砦セーフゾーンと言っても過言ではないお布団が。

まだ微かに震える指を律し、最後のステージへ進むため、画面をクリックした。

『『うわあ……………』』

早くも挫折そうになった。

どうやら最後のステージは廊下のようだ。明かりがついているものの、奥の方は見通せず、暗闇が不気味に口を開けている。

『いやーいかにもって感じ?』

『まだ明かりが付いてるから序の口ってか……………廃墟なのに電気通ってるのアレだけど』

『……………あ、なんか紙が落ちてる。あれ拾えばいいの?』

『えーどれどれ……………』

廊下の真ん中にはメモ用紙のような紙が落ちていた。早速クリックして拾ってみると……………。

『あ、なんか書いてる』

『里奈読んでみる』

『えー……つと?』

『O God. Forgive me for what I have done.

I wanted to be with my loving family for a long time.

I had no choice but to do this.

Our bond will never be broken by anyone.

Forever and ever…….』

『………なんだよ、それ』

…発音めちやくちや綺麗やな

…クツソ綺麗なイギリス英語で草

…俺の学校の英語教師より聞き取りやすい

…ワイも英語ちよつと分かるけどなんととも言えんなこの手紙

…里奈ちゃんちよつとおこ?

…何が書いてあるんや……

『……ごめん。ちよつとあまりにも……アレな奴だったから』

『翻訳するぞ』

「ああ、神よ。私の行いを御許してください。

愛する家族とずっと一緒にいたかった。

そのためにはこうするしかなかったのです。

私たちの絆は誰にも断ち切れない。

永遠に、永遠に……」

『……つていう感じだな』

『やっぱり全ての元凶は母親だったね……勝手に勝手すぎるよ……』

『俺もこれには同情出来ねえな……他に方法があつたらうに』

『今までの情報で、不治の病に罹って心を病んでたつてのは分かってたけどさ……家族を道連れにしたいわけじゃないでしょ』

『同感。結果こんなゴーストハウスになってたら世話無いわな』

母親の気持ちもまあ分かんなくてもないが、家族を道連れというやつちやいけない一線を越えてしまっている。その時点で同情の余地はないと俺は思う。

『んで……他に反応するのは……あ、スイッチがある』

試しに押してみると、予想通り廊下の電気のスイッチだったようで、電気が点いたり消えたり。未だに電気が通っているのが本当に謎だけどまあゲームだからということにしておこう。

などと考えながらスイッチを弄っていると、

『あつ』

『えっ』

ジジツ、という嫌な音と共に、突然スイッチがショート、照明が不気味に明滅を繰り返し始めた。

『やっべ』

『兄上!?! ねえどうしてそんなことしたの兄上!?!』

『まあ……ゲーム進めるためだし?』

『だとしてもだねもうちよつとだね心の準備というものをだね!!』

『そんなこと言っただけでしようごのいじよのいこ』

『えな○か○きやめろ!!』

…あーあ

…兄貴やってんねえ!

…戦犯 兄 貴

…反省してねえな w w w w

…ほら早く進めてホラホラ

…そろそろ鼓膜破りくるー?

…いいよこいよ（音量下げながら）

『えーどうしよ、スイッチがもう反応しなくなつたし……もっかいメモ見ようか？』

『えーどうしよ、これ以上なんかあつたら俺マジで心臓止まりかねないんだが』

『しよーもないこと言つてないで早く進めて』

『んもー全くわがままだなあ里奈ちゃんは』

『その口に粗塩詰めて縫い合わすぞ』

『こわ』

本気で怒られそうなので再度メモを見る。これと言つて変化は……。

『うわっ、血が垂れてきた』

『ひいひい』

『うわー嫌だあーこれ絶対近くいるじゃんメモ下げたらいるやつじゃん絶対』

『言つてね？ 下げる時言つてね？ さっきみたいな不意打ちしたらホント許さないからね!』

『分かつた分かつたハイ下げますよさーんにー』

『早えんだよバカ!!』

『冗談だつて』

…これは愉悦感じてますね

…もはや安心感すらある畜生っぷり

…半泣きの里奈ちゃんの声を聴いていたら、下品なんですけどその、フフ……下品な
でやめときますね

…自制できてえらい

…ほぼ言ってるから自制できてないんだよなあ……

『はい、じゃあメモ下げますよ』

『ごめんもうちよい待って』

『えー』

『このぐらいの我儘許してくれたっていいでしょ妹の頼みだよ!』

『しょうがないなーもー』

『……ふうふう』

『はいというわけで行きまーす』

『いや待ておいこら』

『ジャスト三秒、いい夢見れたかよ？ はいさんにーいちオラア!!』

『うわああああああ人でなしいいいい!!』

里奈の制止も待たずメモを下げる。すると……。

キイーン……という耳鳴りのような甲高い効果音と共に、目の前に長い黒髪をだらりと下げた女がぼやあ、と現れ、こちらに近づき……。

『あつあつあつ』

『やだやだきてるきてるきてる』

『うちはNOK見てないんですよほんとです嘘じゃありません』

『集金やめろ来るな来るな来るな』

『……ッ!』

『や……!!』

再び、廊下の電気が消え、真っ暗になった。

『……………えっ?』

『……………は?! ここにきてまだ引つ張るの!?!』

『嘘だろおい……………こつちで電気点けろつてか』

『えげつねえ……………このゲームえげつねえぞ……………』

…ガチ怯え助かる

…アバター越しにビビってるの伝わってて暗い笑いがこみあげてくる

…マジでホラー苦手なの分かって草生える

…ホラ電気点けるんだよホラ

…クリアはもう目の前だぞー?

…プレイ済み兄貴たちが鬼畜で草

…これはマジで怖い。俺も躊躇う

…でも双子がガチビビリしてるのを見るとなんていうかその……下品なんです、フフ

…画面越しに手を繋いでるのがミエルミエル

…何それかわい

…兄妹の絆てええ

…あれ、動かないな

『……………』

『……………』

どちらからともなくお互いを見やり、意を決したように頷きあう。ここまで来たんだ、もう覚悟はできてる。

それと視聴者鋭いな。恐怖が臨界点達しそうだから思わず手を繋ぎましたよ。こうしたらなんとなく勇気が二倍になりそうな気がするんだ。気がするだけだけど。

『……………行くぞ』

『……………うん』

…ビビった

…心臓止まったわ

…→成仏してクレメンズ

…いきなり目の前で叫ばれるのは本当に心臓に悪い

…いやーでも楽しかったwwww

…クリアおめでとう！

…完走おめ、感想期待してる

…おっ、親父ギャグか？

…誰かのやる気が下がりそう

……あれ、動かないな

…おい？大丈夫かー？

…あれこれマジで気絶してね？w

…マジで動かんぞ!?

…死んでおるぞ!!

…同期に鳩飛ばした方がいいか？

：いやそれは迷惑行為だやめろ

：御簾納ー!!死ぬなー!!!

結局その日、俺と遥香は日付が変わるまで気を失い、その間配信は止まらないままだった。

最終的に鳩を飛ばされたギルバルトこと俊輔さんが電話をくれたおかげで、俺たちは正気に戻り、慌ててまとめに入って配信を切った。

後日、この配信が切り抜かれ、「ライブラフ」「三期生御簾納兄妹、ホラゲ実況でガチ気絶してしまう」「切り抜き」という動画がゲラゲラ動画で再生数を爆発的に伸ばし、結果的に俺たちのチャンネル登録数が一気に伸びた。

同時に、しばらく自室でのホラゲ実況は禁止するという珠緒さんの命令と、お説教を頂いたのであった。

御簾納優斗

『しばらくホラゲ以外のゲームを実況します。頼まれたってするものか』

御簾納里奈

『マネージャーからホラゲ実況禁止令を言い渡されました。こちらとしても渡りに船です』

というぼやきをボヤイターに挙げたところ、「ホラゲして♡」勢と「仕方ないね」勢と「聖様に監禁されて怯える御簾納兄妹ボイスはよ」勢に別れ、混迷を極めたのは別の話。

親父、母さん。

お仕事って、難しいね。

#11 ~陰キヤが遊びに誘うのにどんだけ勇気のリソース使うか知ってるか?~

俺と遥香がV t u b e rとしてデビューしてから、早いもので二ヶ月が経とうとしていた。

デビュー当初は同期で一番チャンネル登録者数が少なく、切り抜き動画もほぼなし。SNSで話題に上ることも稀だったので、とにかく影が薄いと言われていた俺達御簾納兄妹。

今現在、同期にも登録者数が追い付きはじめ、ボヤイターでちらほらと俺達の名前を見かけることも増えた。何より先のホラー実況配信と、その切り抜き動画で一気に火が点いたことが大きく、ようやく話題の波に乗ってきたとも言える。

なにせ同期が同期だ。デビューの際もキャラクター性がニンクアブラマシマシカラメブタダブルみたいな奴らが立て続けに三人も現れて、ようやく最後にあっさりめの漬け物みたいな立ち位置の俺達である。話題がかっさらわれるのも、影が薄いと言われるのも当然だろう。

一番の要因は自分達がコミュ障を遺憾なく發揮した結果だろうが。何を隠そう、自分

の同期以外の先輩V t u b e rとは入ってすぐの最低限の挨拶以降、全くといっていいほど絡んでいないのだ。

セレナはそのトチ狂った下ネタキャラで、ライブラフのみならず外部の男性、特に中年のおじさんとか人外の男という、所謂年上の男性受けが著しい。男性でも躊躇するようなネタで突っ込んでいく様は、まるで命知らずの突撃兵である。

聖は聖でやはり内外問わず、被虐趣味の自覚あるなしに下僕を増やしているようで。特に女性V t u b e r同士でのS Mプロレス——いわゆる茶番——が人気で、中の人のバイタリティーも合わさって積極的にコラボを行っているようだ。

ギルバルトは自営業ということもあり、リアルでの都合は比較的付けやすい。加えて相手の緊張も抜けてしまうようなゆるいキャラでありながら、己の人生経験から来るのだろう包容力が人気で、リスナー、V t u b e rにもコアなファンが多いらしい。

翻って俺達ときたら、常日頃からコミュ障コミュ障言っているせいなのかは分からないが、絡みづらそうだと判断されたのだろう。そういったお誘いは特になく。

かといって、自分達の方からコラボのお誘いなど出来る筈もなく。

結果、チャンネル登録者数が劇的に増えた今でも、ライブラフ内で「友達いない系V tuber」みたいな扱いを受けているのであった。

いや居ますよ？ 友達。セレナと聖とギルバルトいるよ？ 全然いない訳じゃないよ？

みたいな感じのぼやきをボヤイターに投げたところ。

『いやー少ないでしょ』

『他の同期はいっぱいコラボしてるのに君らときたら』

『片手どころか両手で数えられるうちは少ないぞ』

『普通友達って数えきれんぐらいおるもんやで（適当）』

『今すぐ外に出ろ、話はそれからだ』

『誰でもいいからコラボしたいって言いに行け』

などなど大変ありがたい辛辣な言葉の数々。ぼくなきそう。

『ちげーし！今は準備期間なだけだし！そのうち友達100人出来るし！』

と追加でばやくも、

『そのうちとか言ってるから今そんな事になってるんでしょうが』

というお言葉で撃沈。兄妹揃って枕を濡らした。

そういうわけで我々御簾納兄妹の現在の目標は、「誰でもいいからコラボ配信を行う」。いい加減外に出て友達の人や二人作ってこい、との具合だ。

人見知りする子供か、というツツコミは正しくない。子供特有の勇猛さなどつくの昔に落ち着いた我々は、人見知りよりもさらにたちの悪いコミュ障である。

『限定的でいいから会話の選択肢ウインドウが目の前に出てこないかしら』などという妄想をほぼ毎日やるような、会話の仕方を忘れた哀れな獣。忘れちまったよそんな高等技術。

「……………実際問題、どうする？　　というか誰にする？」

「俺達がコラボに誘うどころか相手を選ぶなんて畏れ多いよな」

「でも遥斗、リスナーに煽られて『コラボぐらい出来らあ!』って言っちゃったんでしょ? ボヤイターで」

「うん」

「男ってほんと莫迦」

「頭の出来は一緒だよ」

「なんだと」

はい、リスナーに『どうしたベネツト怖いのか』と売り言葉、『野郎ぶつコラボしてやらあああ!!』と買い言葉で言質取られてしまいました。てへ。

さて、目下問題なのは、誰を誘った場合でも俺達のパッシブスキルが発動してしまう点である。それを考慮して同期の誰かとコラボするのが一番安牌なのだが、

「遥香が『まさか同期とやるなんてチキン戦法はとらないっすよねえ?』って煽られて『やってやろうじやねえかこの野郎!!』って同期コラボ案潰したしな」

「それは謝ったじゃん」

「妹ってほんとアレ」

「せめて莫迦で返してよ」

はい、これは事前にリスナーと遥香によって封殺されてしまっていました。言っただけじゃん頭の出来は一緒だって。

というわけで選択肢はライブラフの先輩かそれ以外の企業V tuber、もしくは個人勢ということになるのだが……。

ここに至っても我らがコミュ障スキルが悪い意味で発揮されてしまう。

先輩方とは挨拶以外、ほぼ最低限の社内連絡ぐらいでしか絡んだことがない。しかも声でなくチャット。

外の企業Vとか個人勢に至っては、そもそもほとんど把握していない。別に接触が禁じられているとかじゃなくて、単純にライブラフ内で精一杯なだけ。うちの中でもアップアップしてるのに外のことまで手が回るか。

なので必然的に、選択肢はうちの先輩方の誰か、ということになる。

「つつつてもなー……………」

「皆とぜんぜん絡んでないしな……」

一期生4人、二期生3人。俺達がライバーをやるきっかけになった神輿羅世良先輩は一期生の一人だ。

だが例に漏れず、世良先輩とでさえ、最初のデビュー配信で交わしたチャット以外、全くと言っていい程絡みがない。他の先輩方は言わずもがな。

第一こんな挨拶以外チャットで絡んでこない愛想のない後輩と、コラボなんざ打診しても受けてくれるのか？ ほとんど接点ないような遠い親戚から「急で悪いんだけど金貸して」って言われているようなものでは？

結論。

「こつちから誘うとか無理だな、うん」

「今は準備期間だから……そのうちやるから……」

俺達は逃げを決め込んだ。

しょうがないじゃない、コミュ障なんだから。言い訳がましいのは重々承知の上だ。

……無論このままで良いわけがないのも自覚しているが、さてどうしたものやら……。

「……………ん？ ウイシユコにメツセージきたな」

「どちら様ー？」

「……………ルキヤ先輩」

「えっ、あのパリピの？」

小比類巻ルキヤ。ライブラブ二期生で、とにかく陽気で突き抜けた明るさが特徴のギヤルの先輩。

その底抜けのパリピ具合で、男女問わず友達が多いらしい。今の俺達とは対極にいる眩しすぎる存在。

そんな人が俺達にわざわざメツセージを飛ばすなんて、一体なんだろうか？

「……………『優斗くん里奈ちゃんこんばー! メッセで言おうと思ったけど、やっぱり口で言いたいから通話しよ!』……………ええ……………」

「すげえ……………常識に囚われないな陽キャ……………」

「遥斗どうする?」

「どうするつたつて……………するしかないだろ、通話」

「マジかよ……………」

マジかよつて言つたつて無視するわけにもいくまいよ。急いでマイクを繋いで通話の準備を整え、遥香に覚悟はいいか聞いて、ルキヤ先輩にコールを送った。

『こんばーっ! 小比類巻ルキヤですーす!』

『あつ、ど、どうも……………御簾納優斗です……………』

『御簾納里奈です……………』

1コールも鳴り止まないうちに爆速で通話に応じ、開口一番ハイテンションで挨拶してくるルキヤ先輩。いやもうこの時点でキャラが強いわ。ガチもんの陽の者やんけ。

『優斗くん里奈ちゃんこないだのホラゲ実況見たよー！ 二人とも本当に怖いもの苦手なんだね！ もう常に笑いつばなしだったから今でも腹筋痛いんだけど！』

『あ、あはは……それは、どうも』

『いやウチもさ？ ホラー系そんなに得意じゃないんだけどさ？ 二人には完敗したよー、あんな綺麗なりアクシジョンとれるともうプロだよねプロ！ ゲーム作った側もあんなだけ怖がつてくれたら今頃ニッコニコだと思うよ！ どうやったらあんなに綺麗に要所所で嵌まれるのか教えてほしいわ！ マジ弟子入り希望！』

『お、おおう……………』

やべえこの人、のっけから口が止まらないんだけど。ノンストップなんだけど！ マシンガンどころかガトリンググトクなんだけど!?

すげえ、陽キャって極めたらこんな口回るのか。しかもめちやくちや聞き取りやすい。陰キャ特有の早口なのにボソボソで聞き取りにくい喋り方とは根本から違う。

でも、ルキヤ先輩はなんで、わざわざ俺達のような陰キャ共と話したいなんて思ったんだ？

『あの、ルキヤ先輩……今日はどういったご用件で……？』

『ふえっ? あ、そーだそーだ! あんねー、二人にちよつと相談っていうかお願いがあつてねー!』

『お願い……?』

『ウチとコラボ配信しよー!』

『はい?』

『ツウエー……イ!! みんなぼんこー!! ライブラフ二期生のパリピライバー小比類巻ルキヤで……すっ!! 今回も爆アゲでやつちやうぜウエイウエー……イFOOOOOO!!!』

『テンション高つけえw……あ、皆さんこんついで、三期生の陰キャな双子の兄の方、御簾納優斗ですうえーい』

『妹の方御簾納里奈ですうえーい』

：うおおおおお!!

：ウエーイ!!

：双子の初コラボきちゃ!!

：まさかのルキヤんと!?

：今日三割増しぐらいでテンション高いなw

：何がどうしてこんなコラボに？

数日後、俺は遥香とルキヤ先輩の三人で配信画面の前に行った。

ライブラフのスタジオで。

なしてや。